母子健康協会シンポジウム

第34回「子どもたちの遊びと体づくり」

日　時　平成26年1月30日(木)午後2時～5時

場　所　アルカディア市ヶ谷(私学会館)

座　長　東京慈恵会医科大学名誉教授　前川喜平先生

1.「子どもと遊び」

東京慈恵会医科大学名誉教授

前川　喜平　先生

2.「子ども達が主体的に遊べる環境とからだ作り」

東京都目黒区立南保育園園長

工藤　恭子　先生

3.「仲間遊びが自然に発現する遊びの環境」

元東京都杉並区立保育園園長
こども環境アドバイザー　東間　掬子　先生

4.総合討論

前川（座長）――

本日、司会を担当いたします、慈恵医大の前川でございます。短い時間ではございますが、ご協力のほど、よろしくお願いします。

まず、本日のシンポジウムの趣旨ですが、現在、幼児期の子どもたちが健全に育つために最も不足しているものは何でしょうか。それは、子どもたちの好奇心や創意工夫によりつくり出される仲間遊びだと思います。遊びの仲間、時間、場所がない現代社会においては、園において大人が遊び仲間、時間、場所を、意図的に工夫してつくる必要があります。遊具は子どもたちの創意工夫により、さらに充実し、発展するものでなければなりません。

本日は、理論的基礎は最小限にとどめ、具体的な仲間遊びについて、遊具などの実例を示しながら、どのようにして子どもたちの仲間遊びを発展させ、体と心を育てるかについて行います。

「子どもと遊び」

東京慈恵会医科大学名誉教授
前川喜平　先生

「子どもと遊び」について、理論的なことについてお話しさせていただきます。

1．幼児期の学習の基本

幼児期は一生のうちで最もいろいろのことを覚え、身につける時期であります。人間の行動の基本的なものは、幼児期に獲得されると言われております。子どもがいろいろなことを体験し、身につけていく過程を「学習」と言います。この学習の過程を観察しておりますと、幼児の学習の基本は、好奇心や関心による大人の真似を含めた遊びによって獲得されるとされております。学習には、このほかに、しつけだとか教育的学習も含まれておりますが、本日は、遊びを中心にして話したいと思います。

2．遊びとは

ここに五つのことが挙げられており、遊びは、①子どもの好奇心や探索心に基づく自発的に行われるもの。②目的がない。③面白くて、楽しい。④現実の世界から切り離されている。⑤現実に直接に役立つという意識がない。

3．遊びの意義

遊んだらどういう意義があるということについてはいろんなことがありますけど、次のことが挙げられます。①運動能力を高める。②興味や好奇心を高め、知的な発達を促進する。③イメージを広げ、表現力を豊かにする。④同年齢、あるいは異年齢の仲間関係を経験する。⑤さまざまな情緒的体験を持つ。⑥自発性、自主性を養うということです。

遊びは、子どもの活動と学びの原点であります。そして、自主性、協調、共感、役割、責任、他者とのかかわり方も遊びで身につけていきます。子どもは遊びを通して必要な能力を身につけ、成長するものです。それで、遊んでいる結果としてこういうことが身につくので、これから話す遊びを大切にしてほしいと思っております。遊びにより、心や体の発達や、社会性、情緒面、それから耐性（我慢すること）、それからやってよかったという達成感の発達などが促進されます。

乳児期の遊びは、母親やきょうだい、その他、養育者

が相手になり行われます。幼児期は、最初は親が相手をして遊んでおりますが、親を基地とした探索行動、公園での並行遊びなどを経て、だんだん子ども同士で遊ぶようになります。子ども同士が遊べるというのは、普通は3歳からということになっていますけど、これも環境によります。見立て遊び、ごっこ遊びなど、種類も多くなります。3～4歳になりますと、ある程度のルールをつくって遊べるようになります。幼児は、遊びを通して運動の敏捷性、適応や社会性を身につけていきます。ここいらは重要なことです。

4．教育との違い

教育というのは、好奇心や自発性とは関係なく、あることを身につけるため、強制的に学習させることが一番の違いです。例えば、ひらがな、漢字、足し算、引き算を学習させるとか、ピアノを習うというのは、この例として既におわかりだと思います。

5．遊びと現代の子どもたちの問題

遊びと現代の子どもたちの問題として、私の感じていることを述べさせていただきます。

⑴三間がない

いわゆる仲間遊びに必要な「三間」ですね、遊ぶ仲間、遊ぶ時間、遊ぶ空間（場所）がない、これは既にご存じのことです。

⑵粗大運動発達からみた仲間遊び

東京都の、保健所とか、健康サポートセンターで二次健診をやっていますけど、ここ二、三年以上前から、歩き方がおかしいという1～2歳の幼児が増えております。昔は、そういう子どもたちは、足の形がおかしいとかの整形外科的疾患が多かったのです。ところが、これらの子どもたちの大部分は、十分に歩かせていないということなんです。それで、ここで皆様にぜひ知ってほしいのは、歩くことでも、反復練習を行うことです。たくさん歩かせるということです。そうすると、今度は歩き方の質が成熟して行くということです。

今から十五、六年前、歩行が記録できるペドスコープと重心計を使用して、子どもがどういうふうに歩き方が成熟するかという研究をしたことがあります。十五、六年前は大人のように歩けるのが3～5歳ぐらいだったのです。ただ、今の子どもは、おそらくこういう研究をすると、昔に比べて、これらの成熟が遅いのではないかと思うのです。それで、粗大運動からいいますと、歩く

ことがちゃんと歩けて初めて走れるようになる。ちゃんと走れて、片足立ちとか片足ケンケンとか、それから横に跳ねる片足跳びだとか、スキップだとか、そういう粗大運動発達が成熟していくのです。それはちょうどビルの工事のように段階的に一つ一つ成熟していきますので、未熟な歩行は、その後の走るだとか、片足立ちだとか、にも影響をするわけです。その結果、皆様よくご存じの転びやすい、転ぶときに手が前に出なくて顔で、顔面制動をするとか、骨折しやすいとか、怪我をしやすいなど、園での生活に関係するようなことが起こってくるわけです。

ここに、これからお話しする移動遊具を使用した園における仲間遊びの重要性があるわけです。この仲間遊びがちゃんとできる前に、0歳児保育からの歩き込みということをぜひ心がけてほしいと思います。とにかく車で連れ歩かない。歩かせる。一緒にいろんなことをするということは、子どもにとっては大切なことなのです。

それから、今の子どもたちで、積極的に遊べない子がいるのです。そういう子どもたちの原因の一つとして、親に丸ごと受け入れられてなくて育てられていることが挙げられます。昔は、いいことも悪いことも、うちの子は丸ごと親が受け入れていたのです。ところが、今のお母さんたちは、いいことをすれば褒めますけど、悪いこと、自分の気に入らないことをすれば怒るのです。そうすると、子どもの心に、十分に愛されていない、受け入れられていない感情が芽生えますので、積極的に遊ぶとか、何かをすることが、非常にしり込みをするようになるのです。ですから、保育園で十分に遊べない子どもとか、仲間遊びができないような子がいたら、みんなでその子をかまって、十分受け入れて、安心させて遊べるようにするというのが一つのことじゃないかと思います。これは言うは易し行うは難しいですけど。それでその方法として、ここに、エリクソンから見た遊びの心理

社会的発達のことが書いてありますけど、とにかくそういう子がいたら、ここに書いてあるように、「赤ちゃんは空腹のときに乳を与えられ、おむつが濡れて不愉快なときにかえてもらい、抱いてほしいときに抱いてもらうとヒトに対する信頼感が生じる。反対に、空腹でも乳を与えられず、抱いてほしいときに抱いてもらえないとヒトに対する不信感が生じて、悪い影響を及ぼす」と。ですから、もしそういう子がいたら、とにかく子どもをかまって、育て直しをしてほしい、というのがここに書かれていることです。

理論的な話は、これを持って終わらせて頂きます。特に私の話でわからないことがありましたら質問をしてください。あとのことは質問用紙に書いてください。後ほど、またお話をいたしますので。

私の話はこれで終わりたいと思います。

それでは、次に工藤先生にお願いします。保育園での実際の遊びについての具体的な例を示しながらお話を伺いたいと思います。

先生は、区立の保育園で働いております。いろんな現状の難しい中で改善しながら、いかに仲間遊びとか、そういうことで子どもを伸ばそうか、そういう工夫をたくさんなされております。お話をお聞きになって、ぜひ皆様方の保育園での実際に役立ててください。わからないことがあったら、後でまたお話をさせていただきます。

では、先生、よろしくお願いします。

「子ども達が主体的に遊べる環境とからだ作り」

東京都目黒区立南保育園
園長　工藤恭子先生

工藤　皆様、こんにちは。ただいまご紹介いただきました工藤と申します。本日は皆様と一緒に学べる機会になったらいいなと思っていますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私が保育士になって目黒区に勤めて35年ぐらいになります。その間、社会情勢の変化とともに、子どもたちを取り巻く環境も随分変わってきたなと思っています。そんな中でも、子どもたちの発達を見極めながら、一人一人が育ちやすい環境をつくっていくことが大事だと思ってきました。本日のテーマである「子どもたちの遊びと体づくり」は、子どもたちの育ちには欠かせないことだと思っています。

目黒区の保育園は、ほとんどが都市部の住宅地にあります。私が今年度より勤めている保育園は、１１０名の中規模な保育園で、園庭は決して広くなく、近くには公園もありません。そのために、週２回ほど遠くの広場まで出かけて行き、体を動かしています。元気な体に育ってほしいという願いから、広々とした空間で走ったり、起伏のある道を歩いたり、また、鬼ごっこなどの集団遊びをしたり、全身を使って遊んでいます。でも、やっぱり子どもたちの体の育ちを見ると、ボディイメージがなかなかつかめず、ぶつかったり、転んでも反射的に手が出なかったりなど、怪我しやすいのがとても心配です。

そこで、身近にあるところから遊べないかということで、園庭をもっと遊べる空間にしようと、職員と話し合いながら、園庭改造に取り組んできました。まずは園庭の整備や道具をそろえることから始めてきました。

（スライド①）

スライド①が南保育園の園庭です。建物の都合上、園庭が２カ所に分かれています。

これよりパワーポイントの映像でお話しさせていただきたいと思います。

狭い園庭での遊びを充実している乳児の様子です。

保育園の園庭での遊びは、狭い砂場で遊んだり、花壇の虫探しをしたり、ただ走り回ったりという状況がほとんどでした。固定遊具もあるのですが、その遊びは、子どもたちが自由に使って遊ぶという形で、保育士はそれを見守っているという状況だったようです。危ないなと思うことにはすぐ中止したり、ルールや決まり事で制限してしまって、子どもたちが本当に遊びたいという気持ちになるような環境ではなかったのではないかなと思っています。

そこで、固定遊具にはこだわらないで、身近にあるものを置いてみようと、古タイヤ、ビールケース、風呂マット、ござなどを園庭に置いてみました。子どもたちが使いたいものを自由に組み合わせて遊べる環境をつくることから始めました。このことは、以前、こちらにいらっしゃる東間先生にも助言をいただいて、園庭改造をしている園も区内にも幾つかあって実践しているところです。

スライド①

（スライド②）

この映像が、０、１、２歳が園庭で遊んでいる様子です。これは、保育士が一緒に楽しく遊ぶということで、友達との遊びが広がっていくというところの写真を撮りました。１、２歳児の子どもたちは、保育士と一緒にタイヤを転がしたり、引きずったりしながら、並べたり、重ねたその上を渡ったり、中に入り込んだりしています。初めは両手でタイヤに手をつき、片足を上げ、中に入り込んでいたんですが、繰り返しやっていくうちに、タイヤの縁に立ち上がることができるようになったり、そこを歩いてみたりという姿に変わってきています。

写真②―１は、０歳児の子どもたちです。風呂マットをいっぱい重ねて、その下にはタイヤを置いています。そこの上を這ったり、ちょっと歩ける子は、バランスをとりながら、ふわふわのマットで歩きにくさもあるのですが、すごく楽しんでいるところです。

②―２は１歳児のとてもいい表情の写真です。タイヤの上にマットを置くと、こんなふうにちょっと沈むんですね。それがまた楽しかったり、バランスをとったりすることをすごく楽しんでいます。

②―３の写真は、風呂マットを何枚か重ねたり、この黄色の箱はコンテナケースです。乳児にはこのぐらいの

②-1

②-2

②-3

②-4

スライド②

高さがいいねということで、取り寄せました。これをひっくり返すと箱型になるので、その中に入って遊んだり、出たり入ったりという遊びもしています。

②―4の写真は、これは2歳児ですが、先ほども言いましたように、この縁に立つことができるようになってくるのは、繰り返し遊ぶことの大事さなんだなと思っております。保育士も一緒に遊ぶことで、どんどん遊びが広がり好きになっていくという姿が見られました。

（スライド③）

こちらも同じですけれども、タイヤをいっぱい重ねています。最初は保育士が重ねていたんですが、そのうち、2歳児のこどもが、③―1のようにタイヤを転がすことができるようになったり、引っ張ったりという姿が見られ、だんだん、みんなで積み上げていくことができるようになりました。③―2は、井戸端会議のように、くつろいだ雰囲気で遊んでいるところです。

③―3は、中をのぞけるぐらい、頭が逆さになっても平気な1歳児の姿も見られてきました。

③―4は、トレーニングのようにも見えますが、タイヤに縄跳びの紐をつけて引っ張るのはかなり力がいります。これも繰り返すことで、すいすいと引っ張り、時

③-1

③-2

③-3

③-4

スライド③

には、タイヤに人を乗せて引っ張るということもできるようになってきて、遊んでいます。

（スライド④）

こちらは、幼児ですが、春のころ、５歳児の子どもたちが、タイヤを全部自分たちで積み上げて、基地ごっこをしていました。それをずっと見ていた３歳児の子どもたちが、５歳児がいなくなった後に、そこへ行って、登ったり、入り込んだりして遊んでいたんですね。一緒に遊ぶまではいかないのですが、自分たちもやりたいという気持ちで、５歳児の後に遊んでいる姿が見られました。

④―１ござの下には、タイヤがいっぱいあります。その上にござを敷き詰めて、最初は保育士と一緒にやっていたんですが、これがお家なんだそうです。子どもの中にはござのすき間に足を入れたり、手を入れたり、何か布団のイメージを持って、そこで寝るというくつろぎの場だったりしているようです。ただ、本当にくつろいでいるイメージもあるんですけど、ござは滑るので、あちこちに力を入れながら登ったりすることを、３歳児の子どもたちの中にもちゃんと蓄えられていると思っています。④―２の写真なんですが、何か雑然として、いろんなものが乗っかっているんですけれども、ここの下に

④-1

④-2

④-3

④-4

スライド④

はビールケースがあったり、ベンチを斜めにしたりして載せています。ここが多分滑り台のイメージで滑るような形をとっていると思います。ここの中は基地になっていて、潜り込んだりして遊んでいます。子どもたちが自然に遊ぶ中で様々な道具を使い考えて遊んでいる写真です。

④―3も同様で、ビールケースをいっぱい重ねて、お家だったり、基地だったり、木のところに、ブルーシートをかざすとお家のイメージになったりして遊んでいます。

④―4は、ちょっと見にくいんですが、フープを並べて、けんけん跳びなどやっていたんですけど、そのうち缶ぽっくりを持ってきて、渡って歩いたりしていました。これも自分たちで考えて遊びが広がってきています。

こちらは、園庭ではなく、2カ所の園庭をつなぐ通路なんですね。そこも利用しようということで、園庭がいっぱいで遊べないときは、ここにも道具を運び、ブルーシートのところを転がったり、ござの下にはビールケースを入れたり、本当にいろんなものを自分たちで組み合わせて遊んでいます。いろんな遊びを取り組む中で体のバランスが随分とれてきたと思っています。

（スライド⑤）

こちらの映像は、4歳、5歳児が主なんですけれども、ここでは、写真にはないのですが、4歳児がビールケースを2段、3段と階段のように重ねて、その上に上り、そこからジャンプしたかったんですね。保育士に、「手を持って」と言ったんですけれども、保育士のほうは、「随分高いね。でも、先生はずっとここにつけないんだ」と言ったら、「わかった」と一言言って、何をするかと思ったら、高いところのビールケースの下に、タイヤ、風呂マットを敷いて、そこがクッションとなるように考えたようです。それで、いざ登ってみると、「やっぱり高くて、降りられないな」と思ったようで、次に何をするかと思ったら、ビールケースの高さを2段に下げたんですね。ああ、そうやって考えるんだと。できるかできないかを試しながら、自分でどうやったらできるんだろうと工夫しながら遊ぶ力がついていくんだなと感じたところでした。

また、鉄棒の下にタイヤを2段重ねて、その上に風呂マットを載せ、鉄棒につかまり、トランポリンのようにぴょんぴょん、鉄棒を触って跳んでいたんですね。そのときも体が半分以上も出ていたことで、保育士は危ないと感じたみたいで、声をかけたら、子どもたちは、どう

⑤-1

⑤-2

⑤-3

⑤-4

スライド⑤

するのかなと思ったら、今度はそのタイヤを広げて、⑤—2の写真なんですけれども、⑤—1の鉄棒にあったものを全部こちらのほうに移動して、タイヤの上にマットを敷いて、並べて、ここの上を歩いたり、跳びはねたりする遊びに変化していきました。ここでも、これがだめならこれという形をとりながら、自分たちで遊びを広げていくという力がつくんだなと改めて思いました。

こちらも、ござの下にはタイヤだったり、ビールケースだったりと、自分たちでつくっています。危なくないように風呂マットを必ず敷くというのも、子どもたちの中で考えてやっているようです。

⑤—3の写真は、登り棒ですが、随分登り棒も上れるようになってきたんですけれど、ちょっと変化をつけてみようと、こちらが長いロープなんですね。ロープといっても、古シーツを三つ編みにしてつくったものなのです。そこで、長いブランコにして、ここに足をかけて乗っている、5歳児の姿です。ここの下にもタイヤを2段載せて、この高さに上って乗るというのもちゃんと考えている。ただ、なかなか、ブランコが揺れてしまうので、人の助けがないとできないときは、友達同士で助けながら、支え合いながら、遊んでいます。

⑤—4もロープなんですが、これは、2階にテラスが

あるのですけれども、そこからロープを垂らして、ターザンロープに見立てて遊んでいます。今はここに並んでいるんですが、最初のころは、早くやりたくて、ロープのそばに行って、とにかく早くやりたい気持ちがすごくあったんですね。でも、危険ということに気がついたときに、この距離を持てば危なくないんだというところで、並び方もちょっと離れてみたりとか、あと、ここにも風呂マットを敷いて安全にしようというところを自分たちで考えてやっているところです。

（スライド⑥）

⑥―1の写真も、これは畳なんですが、古畳を畳屋さんからいただきまして、子どもたちがシーソーにしてみようというアイデアを出したんですけど、畳なのでくしゃっとなってしまって、中に竹を入れて、タイヤで固定して動かないようにしてやったんですが、うまくシーソーにはならず、難しかったんです。それでも子どもたちの中では、楽しいというイメージを持ちながら、しばらくこんなふうにくぐったりしながら遊んでいるというところです。

⑥―2～4の3枚の写真ですが、これは5歳児たちです。タイヤを持ち上げることができるようになってくる

⑥-1

⑥-2

⑥-3

⑥-4

スライド⑥

と、上に重ねるということができるようになってきました。どんどんどんどん重ねて、じゃ今度は中に入ってみようというイメージになって、これはロケットだったかなと思うんですが、隠れ家にしたり、乗り物にしたりというイメージで遊んでいるところです。そのうちかくれんぼうをしたり、隠れたところに誰がいるか当てっこしたり、探したりして遊びが広がっているようです。

タイヤを重ねるのに、大きいタイヤから小さいタイヤへ大きさのバランスが、ちゃんとわかる子は順番に重ねていくんです。大きさにこだわらず重ねていき、ふらふらすることに気付くと、どうしたらいいんだろうと考えてやることを繰り返して、どうやったらふらふらしないかということを考えながら、積み上げて遊んでいます。

これは上が大きいんですけれども、友達に支えてもらいながら、入ったり出たりというところを楽しんでいます。

⑥―3の子は台を使ったんですが、やっぱり入るには、どうやって入ったらいいかという難しさもあるようなんです。何とかこう膝を――その後ちょっとどうなったかわからなかったんですが、何とか中に入ろうというふうに思っているようです。

⑥―4の写真は、ちょうどお店屋さんごっこでやるお店を決めるときに、モグラたたきをやりたいという意見が出たそうです。それが、お庭に出たら、いつの間にかモグラたたきのゲームに変わり、タイヤの中に入って、風呂マットをふたにみたて、閉めたり出したりしながら、モグラたたきごっこに遊びが発展したという内容です。

子どもたちの遊びというのは、本当に大人がはらはらしながら、危ないんじゃないかということを常に思ってしまうんですけれども、でも、意外と子どもたちというのは体で確かめながら道具を組み合わせていくんだなというのがわかりました。怪我にもつながっていかないということを、子どもたちの姿を見ながら、実践できたかなと思います。

最初のころ、道具を出したときは、子どもも保育士も扱いや遊びの予測に見通しが持てず、声をかけるタイミングや援助に迷って、怪我につながったことも何回かありました。でも、そのたびに、ヒヤリ・ハット対策として振り返り、実践につなげていくことを繰り返しています。今も同じように続けています。

私たち保育士が心がけているのは、できるだけ、「危ない」「そのやり方はだめ」という言葉を発しないで、子どもの行為を尊重するようにしています。さまざまな道具を使うことで、子どもたちの空間認知力、視野が広

がってきています。環境を整えておくことで、子どもたちは自分から考え、工夫する。自然に遊びが広がっていき、また、それが魅力的になっていくというところで遊びが発展していくんだなというふうに思っています。その中で体幹や全身の神経を使って遊び、懸垂力や回転力、逆さ感覚、支持力、などが身についていくことがよくわかります。また、園庭は、０歳児から５歳児までが遊べる遊び場というところでは、小さい子たちは大きい子たちの遊ぶのを見て、真似したり、挑戦したいという意欲につながったり、狭い空間だからこそそれができるというのが園庭なんだなというふうに改めて感じているところです。

（スライド⑦）

次は、屋内遊びの様子です。いつも屋外で遊べるとは限らないので、室内でも、どんなふうにして体を動かして遊ぶことができるか考えて取り入れているのが、リズム運動遊びです。乳児からのリズム運動遊びなんですけれども、０、１、２歳児の乳児と、３、４、５歳児の幼児に分かれて、定期的にホールや部屋でリズム運動遊びをしています。

これはホールでの様子です。リズムをするのに大事に

⑦-1

⑦-2

⑦-3

⑦-4

スライド⑦

していることは、子どもたちが体を動かすことが楽しいと思えることや、動かしているうちに運動機能が高められるということを目的にしてやっています。０、１、２歳児の子どもたちは、体を動かすのが楽しいというところから始めています。０歳は、１歳、２歳がやっているのを見るところから始めて、少しずつできることを増やしていっています。音楽に合わせて床で転がったり、仰向けで足を上げたり、交互に揺らすということができるようになってくると、背中がぐんと伸びて、歩行がしっかりしてきたということがよくわかりました。

また、１、２歳児は、ピアノの音で何の動きをするのかがわかり、歌いながら楽しく手足を動かしています。保育士も一緒に楽しみながらやっているリズム運動遊びです。

⑦―１は１歳児の姿なんですが、これは、「トンボのめがね」というトンボの曲なんです。それに合わせて体を、手を左右に振ったり、腰をかがめたり、最後に決めポーズがあるんですが、片足でぴっと立つことができるようになってきています。

⑦―３は、亀のポーズです。初めは、１歳児は、手と足を後ろでつなぐということができない、押さえるということができないので、保育士が押さえてあげるんですね。それを繰り返していくと、自分で足をつかめるようになる。それができてくると、こんなふうにきちんとまっすぐになってくるというのが、この写真で違いがよくわかりました。繰り返すことで、こういう姿がきちんとできて、これで胸がぐんと伸びていくということがよくわかりました。

⑦―２は０歳児ですけれど、まだまだハイハイ、歩行も十分じゃない子どもたちが、見るということも楽しんでいるんですね。音楽が鳴ると体が自然に動く、手足が動くという姿がよくわかる映像です。今は随分動くようになってきていますので、１歳児のように走る、小走りという姿も見られるようになりました。

先ほどもお話しましたように、背中が伸びるというのは、こういう遊びを毎日繰り返すことで、子どもたちの体というのはしっかり体幹が備わっていくんだなというのがよくわかった映像だったので、きょうは持ってきました。

（スライド⑧）

これは幼児です。４歳、５歳児の姿なんですが、乳児とは違い、動き方がきちんと決まっています。保育士もきちんと動きをやりながら、子どもたちにも、そこをで

きるように促しています。５歳児になると、決めポーズのところでは、足がぴんと伸びる。手が真っすぐ。手足がきちんと伸びていくというところまでできるようになってくるんですね。これでバランスをとる。大人でも苦しいポーズだったりするのですが、子どもがそれができるようになってくるというのはすごいなと改めて思っているところです。

こちらも同様で、足をぴんと伸ばす。足先まで伸ばすという行為ができるようになってくるというところでは、リズム運動遊びの中で培われていくなというふうに思います。

⑧―２は、カエル跳びです。足がこんなに上に上がるまでぴょんと跳ぶというか、足が上がるようになってくるんですね。もう倒立のようになるぐらい、できるようになってきます。こういうことができることで、自信を持ってきて、得意になってやっている子どもたちもたくさんいます。

⑧―３の写真は、クレーン車のイメージなんですね。音階に合わせて、曲が鳴ると足をゆっくりおろしていく。ゆっくりゆっくりやるので、かなり苦しいんだと思うんですけれども、足がこんなにぴーんと伸びているというのがよくわかるなと思いました。

⑧-1　⑧-2　⑧-3　⑧-4

スライド⑧

日常的に自然に動くことと意図的な動きをするのを組み合わせながら、足腰、筋力、リズム感、表現力を身につけてきました。年齢ごとに少しずつ難易度を上げながら、発達に合わせて考えています。3、4歳児の子どもたちは、5歳児になったらこんなことをやりたい、あんなふうにできるようになりたいという憧れを持っているので、5歳児は誇らしく思って、自信を持ってやっています。また、見ている子たちからの声援を受けると、気持ちもいいんですね。「すごーい」と褒められるだけでも、子どもたちは、またやってみたいという気持ちになっていくなというのをすごく感じます。そうやってやっていくうちに、機敏さが見られ、巧みな体に育っていくことを感じています。

（スライド⑨）

ほかにも屋内工夫して遊んでいるのは、階段を利用して、体育マットを乗せて上り下りをしています。ビニール製なので滑りがいいんですね。階段は長いんですけれども、ロングマットを2枚重ねてやっています。これがとても大好きで、上らないと滑られないよということもあって、一生懸命上っている姿です。

⑨―1こちらのほうは1歳児なんですが、まだ膝と手

⑨-1　⑨-2　⑨-3

スライド⑨

を使いながら上るという姿があって、それでもなかなか、滑るので上りにくいんですね。そうすると、このマットの縁に手をかけて上ろうとする、これも自然な姿でした。

⑨―2こちらは2歳児です。もう2歳3歳児位になると、膝をつかないで、ちゃんと足の指を使って上るというところの、この違いがよく見えて、発達が見えるなと思った写真でした。

⑨―3これは0歳児なんですけれども、ハイハイができるようになると、階段をこうやって上って、上り下りができるようになって、少しでもそういったところで体を鍛えていこうという意識で取り組んでいる映像です。

子どもたちはいつの時代も元気で活発に遊びながら、心も体も育っていくものだと思います。今の子どもを取り巻く環境は、健全に育つ環境とは言い切れないと思っています。子どもたちが全身を動かし、意欲的で、心も体も育つためには、ある意味、非日常的な環境をつくっていくことも、私たち保育士の役割だと思います。限られた環境の中でも、保育士が楽しい遊びをいっぱい提供して、楽しく遊ぶ子どもたちの姿を通して、またできることを創意工夫しながら、子どもたちの育ちを見守っていきたいと思っています。

これで終わります。ご静聴ありがとうございました。

（拍手）

前川　どうもありがとうございました。

特に今のお示しになったことでわからないことがあったら質問してください。よろしいですか。写真で実例をお示しになってくれたのだと思うんですけど、何かさらにありましたら、後ほどの質問の用紙に書いておいてください。具体的にお答えいたします。

先生、ありがとうございました。

次は、東間掬子先生に、「仲間遊びが自然に発現する遊びの環境」ということでお話をいただきます。

東間先生は、元杉並区立保育園の園長をなされておりました。そのとき、子どもの遊びがいかに貧しいかにお気づきになり、今日までいかに子どもの遊びが出てくるかということを研究されております。仲間遊びに役立つ、いろいろな遊具を工夫、作成し、それを実際に使用してこられました。この研究は、現在でも続いております。すばらしい方です。保育園指針などに遊びのことが記載されてありますけど、そのとおりにしても子どもの遊びが発展しません。仲間遊びの実践的なお話をぜひお聞きください。

先生、よろしくお願いします。

「仲間遊びが自然に発現する遊びの環境」

元東京都杉並区立保育園園長
こども環境アドバイザー　東間掬子先生

東間　よろしくお願いいたします。

私は、主に子どもの仲間意識、人間関係が自然に生まれる、それが環境によって育つものだということを、実践をもとにしながらお伝えをしていきたいと思います。

まず、私のレジメですけれど、これを初めからやっていますと時間がなくなってしまいますから、ざっと要旨をお伝えいたします。私たちは、教育要領とか保育指針によって保育計画を立てながら保育していくわけです。私は、保育士ですから保育指針を読みまして、保育指針は変わってきておりますけれども、子どもの自発性、主体性を尊重するということと、それから人間関係をうまくつくれること、これは昔からずっと変わっておりません。これはもちろん教育要領についても同じことであると思います。とても大事なことですね。

それから、平成2年に大変わりしたのは、指導によらず環境による保育、というふうに変わったんですね。あのときは大変でした。環境づくりを一体どうしたらいいかと。それで、保育指針を一生懸命読みました。そのあとの平成２０年のものは、子どもの自発性に基づいて、何をするかという内容の具体的な部分が少なくなってきたんです。指針によりますと、実際に保育の内容という頁、具体的な項はうんと狭まっていますね。計画におろすことが難しくなってしまった。

例えばどんなものかと思って一生懸命見ていますと、表現の項に水、砂、紙、粘土とか、こういうようなことが出ていますね。それから、保育の内容の項で、「素材や、用具を整える」という文字が二回だけ出てくるんです。先ほどから工藤先生が、たくさんの例を挙げていただきましたけれど、これはやはり環境による子どもの保育の成果ですね。だから、水や砂でもってとても子どもたちはよく遊ぶし、創意工夫もできるんですけど、それだけでは一体何が欲しいのというところの「何が」というところがよくわからない。そうすると、具体的なものは、それはやっぱり皆さんに、実践者に任されているということです。

それで、遊ぶものを具体的に、タイヤだとか敷物だとか、私もいろいろたくさん考えました。それらは私の本にたくさん載っておりますのでごらんいただいて、ご批判をいただければいいんじゃないかと思います。

その素材と用具、一体何だろうというわけですね。これもよくわからないけど、考えなきゃならない。例えば戸外遊びで素材と用具って何か。おもちゃではない。素材・用具って何だろうということですが、はっきりとした定説はわかりませんね。

そこへもってきて、一昨年、文科省から「幼児期運動指針」が出ましたね。皆さん、ご存じですね。つまり、今の子どもの身体能力がうんと劣ってしまっているから、だから何とかせいという、そういう指針なんですね。ですから、これを読みますと大分具体的にはなっています。例えばいろいろな用具を用意せいということがたくさん出てきますね。それで皆さんも、この用具という言葉に惹かれたと思いますけれども、具体的に見ますと、例として3歳から4歳ぐらいは「ブランコ」や「滑り台」という言葉で出てきますね。そういうようなもので遊ばせなさいと。そうすると、皆さん、「あっ」と思いませんか。ブランコはもうありませんよね。どきっとしませんか。どうしますか。買いますか。買ってつけますか。嫌でしょう。いまさらブランコなんか、おっかなくて、できませんよね。だけど、運動指針に出ているんですよ。さあ、これからが悩みですよね。

話がそれますが、私、ブランコ、平気です。私は、自分の園庭でもってブランコ遊びで一度もお医者さんにかかる怪我は何にもありません。それは、3歳までのブランコと、3歳から5歳のブランコと種類が、二つあるんです。私の本に出ています。ゴムと縄のブランコです。これは先生たちはほとんどそばについていません。ついていなくても、誰も怪我しません。しかも、自分たちで挑戦させるんですけど、1歳から夢中になって挑戦します。一人残らず挑戦して、できるようになるんですね。これはまた後の問題になりますけど。

話が戻って、4歳から5歳になりますと、集団遊びとか、素材や用具でもって遊ぶというのがちょっと出てきまして、5歳から6歳になりますと、ほとんど用具と素材で遊ばせるとなっているんですよ。皆さん、読みましたでしょう。どうですか。素材や用具って、私たち、話し合ったこともありませんね。でも、素材と用具と書いてあるんですよ。

それから、「用具等を操作する動き」という項がとても多いの。基本的動きの例が28項目あるうち、用具等を操作する動きというのが11項目もあるんですよ。これが5～6歳。つまり、これを十分やらせて卒園させるということですね。

素材・用具って何でしょう。しかし、5～6歳でも3

歳の運動能力しか無いので、こういうことが立証されたのでこれが出たわけです。それで、皆さん、今ごらんになりました工藤先生の遊具を、私は、素材とか用具だというふうに思っています。それで私は、あえて「遊具」という名前をつけまして、それで本にいろいろ発表しました。このレジメの一番最後に著書名が載っています。その一冊の本に、大体30種類前後のいろいろな私が考えたものが載っています。これは私も責任持って一生懸命つくりましたから、この遊具でもって、お医者さんにかかる怪我は何もありません。今までに、いろんな情報を集めていますけども、大丈夫でした。

それでは、東京のある園の1歳組、6月の室用のこの用具・遊具をちょっと見ていただきたいと思います。1歳組でも仲間遊びをする例です。

（スライド①）

これでもって、もちろんいろいろな身体活動ができるようになるんですよ。子どもの仲間遊びがどのようにできるかというわけです。きょうは、東京都市立の保育園なんですけれども、実はこの保育園で、来年度4月から子どもを受け入れるけれども、それについてどういう遊具を用意したらよいかと、つまり素材・用具ですね、それで私を12月に呼んだのです。私は、このようなもの、こんなものと申し上げました。そしたら、3月までの間に先生たちがそれを山のようにつくったのです。これがほんの一部分ですけれども、ごらんください、この牛乳パックは、特にちいさい子どもには、私の考えた遊具の中で一番良いんですね。

さて新年度が始まって6月、私は再びこの保育園を訪問し遊びの状況を観察しました。これは1歳16名の組です。仲間遊びをするのを、ごらんになってください。

スライド①

この子たちが、4月になって室に入ってきたときに、急にこの遊具を見たわけですね。そして、はっと飛びついたわけです。それでいろいろな遊びをするようになりました。

スライド②

（スライド②）

私は午前中見たわけですけど、例えばこの子は、段ボール箱を一つずつ一生懸命積んでいるんです。そうすると、別のこの子が支えている。手伝っているんですね。この子はそばで見ている子も、そのうちに手伝うかもしれないですけどね。普通でしたら大変ですよ。こんなことをやっていたら、そばへ来たら、「おまえ、どけ」とか、「いや、私のだ」とか、大騒ぎになるんですけどこの場合は手伝っているんですね。

ちなみに、午前中いっぱい私はこの子どもたちの室内遊びにつき合いましたけれども、奪い合いは2回だけ起こりました。あとはお手伝いなど仲間遊びです。6月20日に私が行って、撮らせてもらった写真です。6月というのは、新クラスは4月から始まったばかりでしょう、あまり日にちたっていません。これは16人のクラスかな。それで、半数が4月に初めて入った子どもです。

（スライド③）

これを見てください。この子は積みに集中している。皆さんは、小さい子どもが集中しているというのは、どういう姿を想像されますか。集中しているといいますと、座ったり、腰掛けたりして、一心不乱に遊んでいるところだけを集中と思い、こういうふうに体を大きく動かし

ていることを集中というふうに解釈しないと思うんですね。ところが、子どもは、体を大きく動かすことによっても集中していくんですね。

こんなことをやっていると、普通ならまた外から来てちょっかい出して、自分にもやらせろとか何とかってわーわー始まるんですが、これがそうでもないわけです。

スライド③

（スライド④

この子は、まず一人でこれを、つまり自己選択・自己決定、自由にいろんな物を持ってきていいわけですがこういう型のを、同じ型のを探して並べ出しました。実はこれは、そのうちに2人になって、一生懸命並べるんですよ。ほら、ひとりは探しに行っていて、この子は同じものを並べています。ここへ自然とほかの子どもたちが集まってくるんです。

スライド④

（スライド⑤）

まず、この子なんですけど、ちょっとこっちを向いちゃっているんですが、一番先に来て、ここへ腰掛けたんですが、このつくっている子と、立っていて、顔を合わせたんですね。顔をぱっと見合わせたら、そしたらこの子が来て、ここへ座ったわけです。作った子は座ることを了承するんですね。受け入れるんです。つまり、顔を見合わせるだけですが、それが「入れて」とか「貸して」とか、そんな言葉にかわったようです。

二番目に座った2人が目を合わせて、一番目の子がここへ座った途端に、「あっ」と思って、その後でここへ来て、黙って座るんですね。あ、あの子とあの子が了解しあって座れたから、自分も大丈夫だろうと二番目に座るんです。そしたら、あっちからもこっちからも順に座ったの。次々、次々とね。見ていたんですね。ここの次の席、この次の席というふうに、だんだん腰掛けていって、作った子は、これを了解するんですね。

実はこの時、えっ？順番に座る！と思って、私と担任の先生がびっくりして、そばに立って、この子たちを見ちゃったんですよ。まともに見ちゃったのね、このとき。そして、この子一人だけが私たちの顔を見ているんです。こういうふうに全部大体座り終わったの。そしたら、この子が私たちの顔を見て、手を挙げて、「ばいばーい」って言ったんです。私たちも、あれっと思って、「あ、ばいばーい」って答えたんですね。

スライ⑥

ということは、どうもこの子の頭の中には、みんなお腰掛けをして、それで、ほら、もうみんな座ったから、これから出かけるよというイメージがきっと出たんでしょうね。それで「ばいばい」と言ったのね。午前中いっぱい、この子たちの会話は、私が聞き取れたのは、この「ばいばい」だけでしたね。

それで、こういうふうにして以心伝心言わずもがなで遊んでいたわけです。

（スライド⑥）

それから、これが1歳組のおままごとコーナーです。先生たちは「ままごとコーナー」と思ってつくったんですね。ここからここまでがコーナーなんです。それで、この4人が勝手なことをしている。エプロンだけは先生にかけてもらいにいったと思うんですけど、見てください、勝手なことをやっているのね。つまり、ままごというのは、テーブルの上にお茶碗を並べたりなんかして、それで赤ちゃんを寝かせて、「こんにちは」とか、先生がいたらそういうふうにさせちゃうと思うの。ところが、この子たちがやりたいようにやらせておくと、こんなままごと、お家ごっこになっちゃうんですよ。でも、ここで先生がああだこうだ言わない。ここでずっと30分以上

スライド⑥

もこうやって遊んでいましたね。もうめちゃくちゃなもんです。適当なもんですね。でも、この子たちはこうやってずっと長いこと遊んでいる。ということは、こういうものがあり、こういうものもあり、いろんな選択肢があるから、子どもたちが考えて遊ぶんですね。

ままごとコーナーの椅子が、大きいのがミソです。小さいのだったら、持っていっちゃう。運んじゃうの。そうすると、先生が、「この椅子はここで使うの。持っていっちゃいけません」と、また始まるのね。それだから、これは、そんなことを言わないように考えなさいと言ったら、先生が考えて、こういう大きいのをつくったんです。こんな大きいのは、子どもたちはどこかへ持っていけないのね。だから、「だめ」と言わないで、どういう構造にしたらばいいかということを、先生は考えるんですね。

（スライド⑦）

実は、この子たちはまたほかの遊びもするんです。段ボール箱を、それぞれ４人が持ってきて、くっつけたんですね。そう思ったら、一人ずつがそれぞれミニカーを持ってきて、その周りに自分たちが座る、腰掛けみたいな箱みたいなものを持ってきて、自分たちが入って、四

スライド⑦

方に座って、ミニカーを、ウー、ウー、ウー、ウーといって、箱の上をこうやって、座った4人が動かしているんですね。つまりサーキット、レースみたいなことを考えているんですね。ですから、箱を持ち寄る、それからミニカーを持ってくる、それから座る、それからウー、ウー、ウーですから、全部の遊びが20分間以上続くわけですけれど、こういうのをやっている。

1歳組の6月でこのように仲間遊びをする。つまり、先ほどからごらんになりましたように、いろんな遊ぶものがありますよね。これを先生たちが多く用意して、子どもたちのとりやすい場所に置いて、先生が何にも干渉しないと、子どもたちというのは、二度ばかり奪い合いがありましたけど、それ以外は、ずうっとこうやって遊ぶんです。遊ぶものが、このように大きくて体を動かせるもの、これが多種多数あることが必要だと思うんです。つまり、多種というのは、素材用具のいろいろな組み合わせを考えるんですね。それに多数あると奪い合いも起こらないということです。

一応これで終わりたいと思います。

前川　ありがとうございます。

先生、一つだけ、レジメに、「遊ぶ時間は最低90分」と書いてあるんですけど、そのことをちょっと触れていただけますか。

東間　わかりました。

先ほどの運動指針には、1日に最低60分以上は外遊びをさせるべきだということが書いてあるんです。それで私は、「できれば最低90分」にしたいと。それはなぜかという意味を、去年の保育学会で発表いたしました。そうしたらば、「ああ、やっぱり90分だ、60分なんて少な過ぎる」、なんておっしゃってくださった先生もいらっしゃったんですけど、研究は全部観察です。

つまり、多種多数のいろんなものがあるということが前提ですけれども、子どもたちはまず外へ出ますね。外へ出ますと、多種多数のもので急に遊び出すかというと、やらないんです。ちょっとこの辺のものを持ってきて、その辺にぽんと捨てたりしてね。それから、あっちの場所へ行ってちょっとやったかと思うと、こっちへ行ったりね。何でこんなにだらんだらんして、遊ばないのかと思っているうちに40分経つんです。40分たちますと、何人かでがーっと、その持ってきたもので遊び出して、遊びが高まって、発展していくんです。その時間を、私

は、集中の時間と思っているんです。

どうして集中と言い切れるかといいますと、この時間帯に、60人とか70人ぐらいが全部園庭で遊んでいるんですけど、園庭全体がしーんとするんです。物音も何もしなくなっちゃって、子どもたちの歓声や話し声も何にもなくなって、しーんとしたまま、いろんなところでみんなが、いろんな、それなりのものをつくり出しているんです。

見学の先生が見えると、見学の方々が、「あ、静かになりましたね。へえー」といって、見られるんですね。この静寂が30分間続くんです。30分間続きますと、大体それなりのものができるんです。そういう小集団が多く発現して遊びます。これは一体何人かということも観察しようと私は、15年前と15年後、小集団の人数観察を行っています。この小集団が、平均すると3・6人です。それで創造物をつくり出すんです。つくり終わると、そのつくったもので遊ぶんです。遊ぶ時間と、あと、片づける時間が全部で20分間ぐらいなんです。つまり、つくる過程は40分＋30分なんだけど、それ自体で遊ぶ時間というのは割と少ないですね。それで片づけるんですね。全部合わせると90分間なんです。

よく遊びを集中させなければならないとおっしゃっていますけど、集中が来るまでは多種多数の物を自由に選択させて、結局90分間が必要なんだなということが、これで私は大体わかったわけです。園庭がしーんとするような、そういった状況を、私は知っているよという園長さんは、今までに4人ぐらいしかまだ知りませんけど、いずれも、たくさんの素材・用具を使いこなした先生方です。

だから、多種多数の遊具、遊具というけど、これを素材とか用具とか、この指針どおりに解釈していいんじゃないかな、どうなのかなと思います。皆さんのご意見は後からでもお伺いさせていただきたいと思います。

時間を過ぎてしまってすみませんでした。

前川　どうもありがとうございます。

今のお二人のお話でのいろんな質問は、ぜひ質問用紙に書いて、渡してください。これから休みをはさんで、皆さんと一緒に話をしたいと思います。

〔休　憩〕

総合討議

前川　前半の講演に対してたくさんの質問が来たので、シンポジスト一同、感激しております。その感激をもとにして、これからお答えします。

参加者の中で、お子さんがいらっしゃる方は手を挙げ下さい。

ああ、うれしいですねえ。それで、こっちから質問があるのです。子どもが歩き始めるときに、危ないからと一々支えられた方、いますか？　歩き始めはボーンと尻もちつきます。それで、だんだん歩いているうちにうまくなるでしょう。遊びもそうなんです。子どもというのは、発達するために必ず挑戦して、危険を侵して自分のものにしていくのです。だから、子どもらしく遊ばせるには、ある程度そういうことを考えて、危険に挑戦して、かつ、怪我しないように育てなくてはいけないです。

ところが、今の親御さんたちは、怪我をすることを極端に恐れています。ですが、それをしないと、子どもの運動発達も、いろいろなことも発達しません。それを親御さんたちにいかに納得させるかということが、これからの討論の一つのテーマではないかと思います。

それでは、東間先生に来ている質問、一つか二つ、答

えてください。

東間　それでは、お寄せいただいた質問からお答えします。

　アトランダムですけれども、まず読みます。「来年度について。０歳児クラスに、今からつくれて運動遊びができる手作り遊具はありますか？」

　はい。０歳は、大きなこんなスロープ、こういうようなものが大体置いてありますね。それはそれでいいのですけれども、０歳児は、歩けるようになりますと可動遊具にとりつきます。例えば牛乳パックでも、Ｌ字型のもの。そうすると、ここにつかまって押しながら歩くんですね。そういうことがありますから、やはりあっていいと思います。後半になると大体歩けるようになります。そうしますと、牛乳パックでもいいし、ほかのものでも、例えば、世界文化社から出ている、『０・１・２歳児の手作り遊具』という本がありまして、それに36種類ぐらいの手作り遊具が載っております。これは、私のレジメの一番最後に載っております。

　あとは、０・１・２歳の室内遊びですね。その本にも、これは主に室内遊具ですけれども、それが載っております。

　それから、園庭遊びですけれども、できれば０・１歳用ぐらいの砂場を別につくるということを、「エデュカーレ」で私は５月に発表しました。そうしましたら、とても反響が多くて、「砂場を別にしてみたい」というお話がいろいろあります。それは「エデュカーレ」の５月号に載っていますので、どなたか持っていらっしゃる方もおられるかと思いますが、ごらんになってみてください。

　それで、例えば、今までの砂場の小さいシャベルで、ままごとという感覚ではないような気がします。だから私は、レンゲとか、スプーンとか、おしゃもじを買って持っていってあげたのね。そうしたら、０・１歳がとても喜んでそれを使うのですが、なんと４～５歳の女の子がみんなそれを持っていっちゃった。皆さん、こういうものは１００円ショップでいっぱい買えますから、どうぞ購入してあげてください。

　運動遊びはゼロちゃんはぜひ必要です。ゼロちゃん組には意外と設置遊具があるんですけど、１～２歳組になると、パタッと大きく遊ぶ物が部屋からなくなってしまう、そういう保育園が結構多いんです。そうではなく、やはり１、２歳も室内には大きい遊具を沢山入れてあげてください。

　次に、可動遊具。「どのくらいの時間でつくれますか。

また、片づけずに部屋にずっと出しておくものですか」。例えば、牛乳パック1個の中に新聞紙を22枚、畳んで入れます。その入れ方も何も私のホームページにも出ていますし、私の本にも出ております。例えば「4連パック」と言いまして、牛乳パックを4つ並べたものです。このくらいの大きさのもの。それから、4つを縦長につくったこのくらいのもの。子どもたちが遊ぶのですから、パッパッパッパッとつくっても、4つを1つにまとめてつくるのに2時間ぐらいはかかるような気がします。

実は公立の保育園の場合は、1、2、3月は0・1・2歳組の先生は少し手が空くから、何かつくってと言うんですけれども、今はぎりぎりいっぱいの人数でやっていらっしゃる民間の園が多くなっています。そうすると、民間の園の園長先生は計算なさるの。1日に保育士に1人1万円払ったとすると、その保育士は3つぐらいしかできない。そうしたら、1個3，330円、非常に高いと。

そうしたら、石川県の木工所さんが手を挙げたんですね。私のところなら1個1，000円台でつくりますと。上からダンボールをやって、とてもやわらかくつくったの。「アルボカンパニー」さんというところも検索してみてください。そこで聞いてみてください。どっちが安いかとか、時間があるかないかという、保育園のいろいろの事情があると思います。それで用意もできるのではないかと思います。

それから、「片づけずに部屋にずっと出しておくものですか」。遊んでいる最中は、お片づけはしないようにしてあげてください。例えばマットを出すでしょう。こう広げて、広げてやっているかと思うと、ひょっと向こうを向くと、トトトトッと向こうへ行ってしまって、またそこでもってワッと広げ出すんですね。そうすると、先生が、「ちょっと待った！　ここにある物を片づけてからいきましょう」と言って、ほら、お片づけねとやってから、その次に行くんですね。

この辺はセンスの問題ですけれども、私とか、慣れた保育士たちは、それはやらせないほうがいいと。なぜかというと、遊びというのは子どもにとっては継続なんです。テンションがだんだんだん上がっていくわけでしょう。途中で遊びを小間切れにしないというのは、そこのところではないかと思います。パッと切っちゃう。そうすると、「この次……今！」と思っていたその気持ちは、もうなくなってしまうわけです。

ですから、例えば、今は部屋の中で1時間とか1時間半遊ばせるんだと思ったら、その時間は遊んで、あとで

片づける。そうすると、先生たちは、部屋の中がごちゃごちゃになると言うんですね。ごちゃごちゃになっていいんですよ。子どもにしてみれば、ごちゃごちゃになるから、見渡せば自分の好きな物が見えるわけです。ところが、箱に入れてしまってあると、どこに何があるかわからないのね。

よく、片づけの下手な大人の人がいるんですよ。部屋中こんなになっている人がいます。その人に、どうしてなの？　と聞くと、見渡せば自分の物がすぐ見える。全部、本棚の中にピシャッと入ってしまうと、一々、一々、探すことになるかもしれないと。大人がそんなふうになっているのはみっともないかもしれないけれども、子どもの場合は本当にそのとおりだと思います。あっち見てホイ、こっち見てホイでね。

ですから、出しておくというのは変ですけれども、出しっぱなしになって、お片づけの時間には片づけて、つまり、子どもたちが取りやすい場に必ずあるということがいいわけです。収納のこともちょっと出ておりましたけれども、とにかく狭い部屋なのに収納できる。その「収納しやすい」というものを考えて、例えばぱたぱたは畳めますとか、畳んで収納できるとか、シュッと立てて棚と棚の間にスイッと入れられるものとか、本棚のようなものにバチッと入るものとか、そういうものを考えて、考えて……。もちろん、収納しにくいものもありますけれども、でも、考えて、考えて、いろいろつくってあります。それが私の本にありますので、皆さんごらんになって、あ、これは収納できるなと。

もう一つ、うんと狭い保育園は、部屋だけではなくて廊下も使います。廊下には、子どもの上着だの何だのが掛かっていて、廊下がこんな狭くなっているのに、なおかつそこで遊ぶの？　なんて言いますけれども、工夫して、子どもたちの掛ける物をもう一段上のほうにつくった園があります。だから、下が子どもたちの上着。上に一段荷物の袋を下げるとポッと廊下が空いたりします。でも、このくらい狭い廊下でも、例えば０・１・２歳組は、４連パックみたいなものを二段ぐらいにして、並べて廊下の隅に置くんです。そうすると、子どもたちは廊下へ出ると、左右から出してきて十分に廊下で遊ぶ。

これは「エデュカーレ」にも掲載したんですね。そのときに汐見先生に相談したのです。「先生、とても狭くてどうしょうもない園があるけど、廊下でも何でも遊ばせようかと思いますが、どう考えますか」と言ったら、汐見先生が、「廊下だろうが玄関ホールだろうが、どこでも遊ばせてください！」といって、やりましたのです

けど、そんなものだと思いますね。

前川　ありがとうございます。

今のことに関連して、牛乳パックの話が出ました。皆様からいただいた質問で、「牛乳アレルギーがあるので牛乳パックを使っていません」とか、アレルギーのことが出ていたのですけれども、僕は健診とかいろいろなことをもう30年以上やっていて、絨毯を敷いて子どもの発達を見ていますけれども、子どもの発達を見るのに、牛乳パックがすごく役に立つんです。それを使って牛乳アレルギーになったということはないですね。恐らく先生方も、お使いになって、アレルギーをおこしたことはないと経験しているのでは……。

牛乳パックの中を開いて、牛乳の入っているのをやればなるけれども、普通、開かないでつなげているだけです。そんなことを言ったら、スーパーへ行って牛乳の売り場を歩けないよね。そうでしょう？　だって、そういうことは聞いたことがないもの。今、いろいろな食物アレルギーがあるけど、スーパーの牛乳売り場へ行ってショックを起こしたというのは聞いたことがないから、恐らくパックからは問題ないと思います。

今のところ、医学的に言って、普通に使用している牛乳パックの使用の仕方で食物アレルギーの子がどうにかなることは、まず考えられないと僕は思います。もし本当にそういう子がいたら、それこそ専門家に任せて、本当に牛乳の食物アレルギーかどうか聞いてほしいのです。ほかのことがなくて、ただ親が牛乳アレルギーですからということを真に受けるのは間違いだと思います。

もし、そのことについての質問があったら、去年の保育指針に食物アレルギーの話が出ていますので。それでもお読みになれば結果がわかります。よろしいですか。

では、次に工藤先生。

工藤　たくさんのご質問、ありがとうございます。やはり一番気になさっているのが、いろいろな物を使うことで怪我につながるのではないか、そのときの保護者対応はどうなんだろう、というご質問が何件かありました。

「保護者に怪我したことを伝えた時、なぜそのような遊びをさせるのかと言われたことがありますか」というご質問ですけれども、ありました。

2歳児のお子さんでしたけれども、ビールケースを渡って歩いていったときに、ビールケースを逆さにすると穴があいているところに足が引っかかってしまいまして、そのまま倒れてしまったんですね。頬でしたか、そこを怪我したときに……そのお子さんはバランス感覚

が弱かったんです。何度か怪我をしてしまったことがありまして、「怪我が多いですよね」と言われたことはあります。

ただ、お子さんの発達も踏まえながら、どんな遊びをしているかというのは事細かく保護者の方に説明して、受診もしたかと思います。念のための受診ということもありますけれども、専門の先生に診ていただいて、大丈夫だよという確信をいただいたりすることも何回かありました。

子どもの行為を尊重しているところで親の反応がどうか、というところですけれども、年に1回、新年度のときに保護者会をいたします。そのときに、こんなふうな遊びをしていますよ、子どもの発達はこんな状況など話をする中で、説明をしています。その後、クラス懇談会の中で、実際遊んでいる子どもの映像だったり、動画だったり、その中で保護者と懇談しながら、保育園の保育の様子を伝え合いながら進めているところです。

それから、保育参観、保育参加を保護者の方にしていただいて、実際遊んでいる様子を見ていただくことも1年を通してやっています。そうすると、「こんなことができるんですね」「すごくのびのび遊んでいますね」というようなお話もいただいています。

先ほど、片づけの話も出ていましたけれども、うちの園も園庭が狭いというところで、最初の園庭の映像があったと思いますが、ただ隅に寄せているだけなんですね。一応、置く場所は決めていて、そこから子どもたちが運んでくるということをしています。本当に収納場所がないので、園庭の一角を収納場所という形でやっています。

先ほどの片づけはどうなんだろうというところですけれども、先ほどのお話の中にも、年長が遊んだ後――年長が片づけずにそのままお部屋に入ったのですけれども、その後、3歳が遊ぶという姿が見られるというところでは、その状況に応じて、また遊びたいという思いがあった場合はそのままにして、また夕方遊ぼうねというふうにして遊んでいることがほとんどです。

ですから、最終的に片づけるというところは、「もうお部屋に入るよ」と言うと、片づける子もあれば、入ってしまう子もありますけれども、そこは遊んでいく中で、片づけしなければいけないというふうにだんだん育っていくのかなと思っています。

ござも結構使って遊んでいるので、ござも巻けるようになったんですね。なかなかござを巻くという機会がないと思いますけれども、3歳児の子どもに、「もう片づけるよ」と言ったら、ござを巻こうとして、それも両方

から巻いてしまったんですね。お互いに巻きたいという思いがあって、両方から巻いてぶつかってしまったのですが、じゃあ、そこは一緒に片づけようねと、自然にそんな姿もあり一緒に片づけるという意識が出てきているかなというのは感じました。

怪我対策について、ヒヤリハットですけれども、毎回、そういう事故や怪我が起きた場合は、クラスなり全体で話をするように意識はしています。ただ、「やらせない」ということではなくて、「何ができるんだろう?」という話をしていきながら、怪我したものを排除するということはしていません。危険な箇所はもう一回見直そうというふうにしながら遊べるようにしているので、そこは保護者にも理解していただきながら進められているかなと感じています。

実際、タイヤ、風呂マット、ビールケース、ござなどを自由に遊ばせられるというところで、職員の意見の統一に要した時間のご質問がありましたけれども、東間先生のお話を伺って、ほかの園の研修に参加したり、自分も実際に経験していますけれども、「みんなでやってみよう」というところからスタートして、最初はやはり怖かったと思うんですね、いろいろな物を使うというところでは。最初はタイヤを二段だけというルールを決めていたのだそうです。でも、二段以上の遊びができないんだと思ったときに、じゃあ、この子たちの遊びはどう発展していくのだろう、というふうに思ったのです。そこから、どういう遊びをしていくことで、子どもたちの遊びが怪我につながらなかったり、いろいろな遊びへと広がっていくんだろうねというような話をしながら、今、自分たちの保育をビデオに撮りながら、大人のかかわり方、子どもの遊び方というのを勉強しています。十分なビデオでなかったりもしますけれども、園の中でみんなで学び合おうというところで、今、実践しているところです。

それから、「コンテナについて詳しく知りたい」という質問についてですが、コンテナでも大きさがいろいろあるので、実際見て、これだったらいいかなというものや、強度も大きさによっては薄くなったりする部分があるので、そこは見極めなければいけないのではないかと思います。

それをビールケースと合わせられるとよい、というふうにおっしゃられていますけれども、そこはもう子どもが考えることだと思うんですね。一応、私たちは、こういう物があるよというのは置いておきますけれども、そこから子どもたちがどういうふうに遊びをしていくか

というのは、子どもの発想に任せていけたらいいのではないかと思っています。

ただ、乳児に関しては、最初から子どもが、はい、コンテナで遊びましょうというわけにはいかないので、ちょっと設定したり、仕掛けたりしていますかというご質問もありましたが、何気にそこにコンテナをポンと置いておくと、そこの中に入ってみたり、風呂マットなどを敷いていたら、その上に寝ころがってみたりという、そんなところからどんどん遊びが展開していくのではないかというふうに思っています。

東間　工藤先生、先ほどの保護者対応のところで、ちょっといいですか。

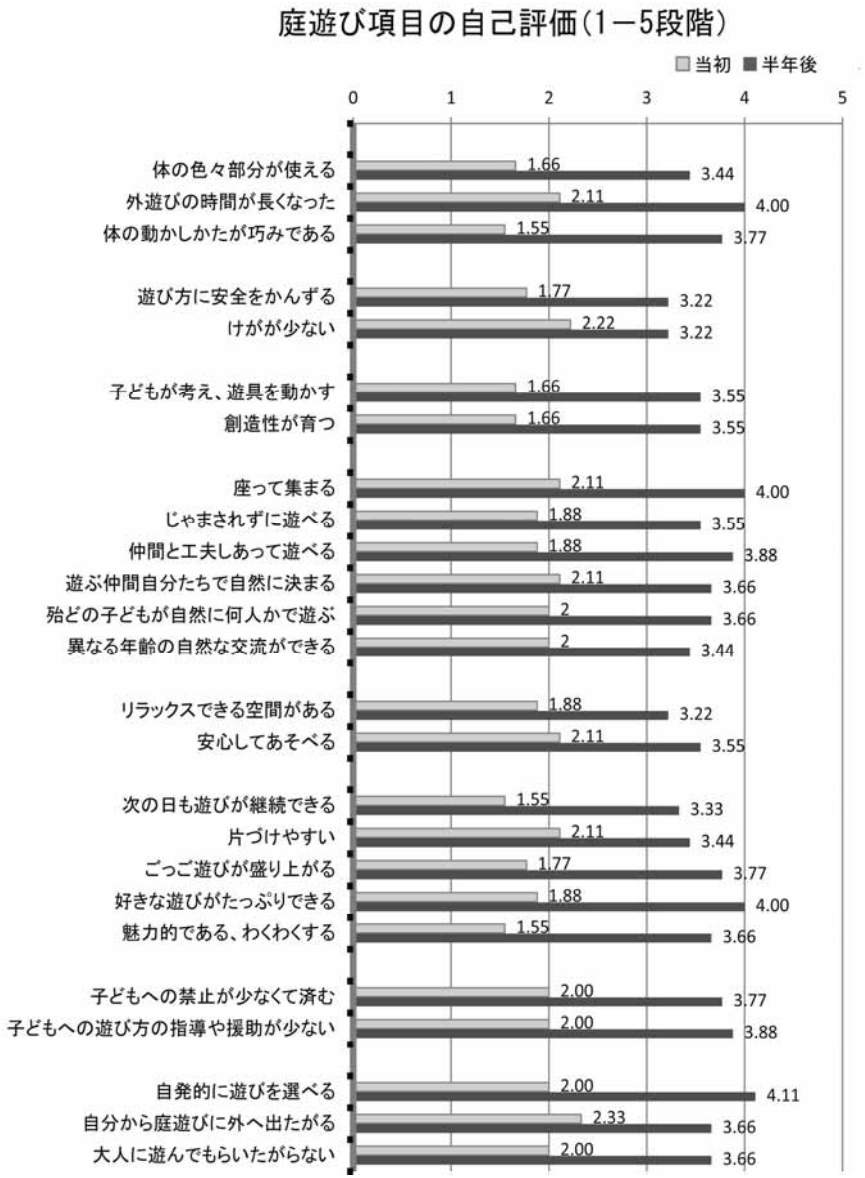
工藤　どうぞ。

東間　保護者対応のことで、例えば、園庭でこれだけの遊びをしていたらば、子どもにも、どういう効果があったかということを保育士に自己評価してもらうということをしました。よく遊びます、子どもがよくなりましたとか、そういう言い方もいいのですけれども、より客観的な保育士自身の自己評価ということが言われています。

例えばこの表なんですけれども、園庭のアンケートで職員全部が自己評価をしたわけです。下段がビフォアです。上段がアフターで、これは半年たった後です。皆、さんごらんになるとおわかりだと思いますが、半年たったら、評価が約2倍になっているでしょう。評価は1～5段階なんです。大体、初めは2ぐらいなのです。2点幾つぐらいなのが、大体、4に近くなっています。半年でこういうふうに上がっています。

自己評価の項目ですけれども、後ろの方、読めませんでしょうか。例えば、「物を大切に使われ、次の日も片づけやすい」「異年齢の交流」「ごっこ遊びが盛り上がる」「遊びがたっぷりできる」、この項目は全部職員がつくったのです。職員が、遊びの効果、つまり、保育の質をどうやったらいいのかということを考えて、この項目をつくって、その項目にしたがって職員が全部評価したのです。それでもってこれだけの効果が出たわけです。これは、都下の保育園です。

こういうものを保護者会に出して、これこれ、子どもの発達に必要なこういうことについて、職員の自己評価ですけれども、でも、「これだけ上がってきました」ということをお伝えすることによって、また、先ほどの工藤先生のいろいろなお話を伝えることによって、保護者が遊びの質というものに目を向けてくれる。自分たちの子どもがこんなに立派になってきているのかというこ


庭遊び項目の自己評価（1－5段階）
当初
半年後
0
1
2
3
4
5
体の色々部分が使える
1.66
3.44
外遊びの時間が長くなった
2.11
4.00
体の動かしかたが巧みである
1.55
3.77
遊び方に安全をかんずる
1.77
3.22
けがが少ない
2.22
3.22
子どもが考え、遊具を動かす
1.66
3.55
創造性が育つ
1.66
3.55
座って集まる
2.11
4.00
じゃまされずに遊べる
1.88
3.55
仲間と工夫しあって遊べる
1.88
3.88
遊ぶ仲間自分たちで自然に決まる
2.11
3.66
殆どの子どもが自然に何人かで遊ぶ
2
3.66
異なる年齢の自然な交流ができる
2
3.44
リラックスできる空間がある
1.88
3.22
安心してあそべる
2.11
3.55
次の日も遊びが継続できる
1.55
3.33
片づけやすい
2.11
3.44
ごっご遊びが盛り上がる
1.77
3.77
好きな遊びがたっぷりできる
1.88
4.00
魅力的である、わくわくする
1.55
3.66
子どもへの禁止が少なくて済む
2.00
3.77
子どもへの遊び方の指導や援助が少ない
2.00
3.88
自発的に遊びを選べる
2.00
4.11
自分から庭遊びに外へ出たがる
2.33
3.66
大人に遊んでもらいたがらない
2.00
3.66

表①

とがわかってくれると、ちょっとした怪我があったときなどにも、理解をいただけるということが違ってくるのではないかなというふうに思います。

表②

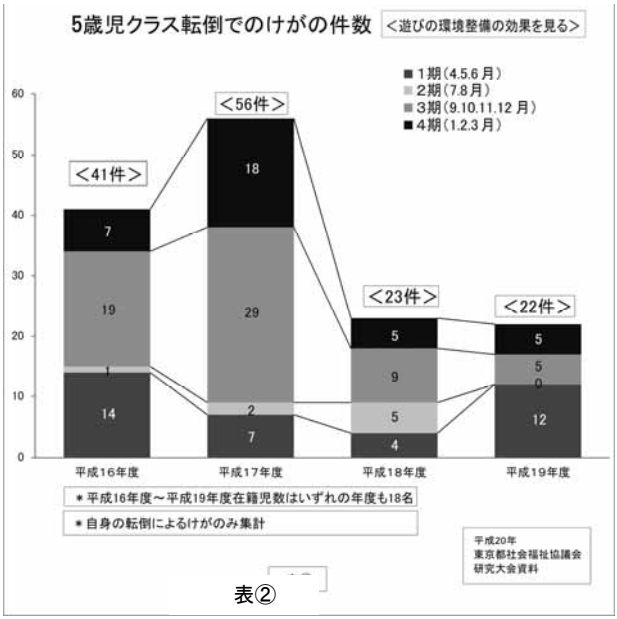
今度は怪我のことですけれども、平成20年度に東社協に発表された資料です。

新宿区の保育園で、5歳クラス・転倒でちょっとでも怪我をした子が、1年間に41件、次に56件と多かった時期に、園長が考えまして、園庭と保育室を変えて、遊べる物をいっぱい出したんです。いっぱい出して、自由に遊んでいいと。そうしましたら、2年目で逆にちょっと増えるんですね。3年になるとヒュッと下がって……これですね。実はこの後、ずっと7年間まで記録して10件以下ぐらいに少なくなりました。

とにかく遊ぶ物がいっぱいあって、遊ばせる。わりと単純なことですけれども、こんなに怪我が減ってきたということです。

問題は、ここの2年目で、ここでいっぱい用意してみて、ここで用意したと思ったら、2年目に少し増えたのね。これは、ここの保育園だけではなくて、ほかにもこういった傾向があるのです。なぜか。これは仮説ですけれども、要するに、子どもが初めて2年目に体ごと動き出したんだなというふうに思います。それで、身体が良く動くようになりけががずうっと減ってきた。そういうことがここでもって立証されたということです。

こういったことも、いろいろな統計とか観察とか、そ



表②

ういうものでもって一つずつ裏付けをしていくという方法をとっているということです。観察と記録と数字という難しいことではないです。ただこうやって書いたものを集めて足せばいいわけですから、皆さんもきっとできると思います。

工藤　実際、この統計を見て私も思ったのですけれども、やはりいろいろな物を園庭に出すことによって、子どもも戸惑い、保育士も戸惑うというところでは、危険につながることが多かったなというのを感じます。今年の春から夏にかけて、怪我は結構多かったです。この時期に来てだいぶ減ってきて、子どもたちも扱い方がわかるようになった、保育士もそれを見守ることができるようになったという姿があるのではないかと、今、東間先生のお話を伺って感じました。

　それから、「広くない園庭で0歳児から5歳児までどのように遊ぶのか。全クラスが一緒に遊ぶ日もあるのか」というご質問です。そこは、以前は、何曜日は何歳、何時から何時までは何歳という決まりもあったようですけれども、今はそれは取り払っています。ただ、幼児の子どもたちが遊んでいるところに乳児がポーンと入るときもあるんですね。活動によっては、ちょっと邪魔になってしまうこともありますけれども、そこは保育士同士で、どうするかということを決めるようにしています。

　この間、園内研修をやったときに、4歳児の子どもたちが庭で遊んでいたんですね。そこに1歳児の子どもたちが自然に入っていったときに、4歳児の担任が、“来ないでオーラ”を出していなかったというふうに1歳児の担任が言ったんですね。やはり、邪魔されたくないのではないかとか、そういう意識がどこかにあると、保育士同志もそういうふうな表情になってしまうんだなというのをすごく感じたんです。

　でも、そこで1歳児の担任が、4歳児の担任も受け入れてくれているんだ、子どもたちも自然にそれを受け入れられるというところが、自然なかかわりだなというふうに思っています。ですから、4歳児の子どもたちは、小さい子たちにちゃんと受け入れられる姿勢ができているというのを研修で話されたのが、すごく印象的でした。ですから、時間とか、曜日というこだわりはなく、遊びたいときに遊ぼうと。ただ、例えば5歳児が使いたいよというときだけは保障してあげようということを、職員の中で連携し合っています。

　園庭は2つに分かれてはいますけれども、保育士の配置というところでは、遊びに応じて、年齢問わず、そこ

に子どもが来たら一緒に見ようというふうにしています。定数はあるので、そこはちゃんと守っていかなければいけないと思いますけれども、何人入れたから何人ねというふうな決まりはつくっていません。お互いに見合うように意識しているところです。

それから、「風呂マット、タイヤの数はどのぐらい必要ですか」というご質問が何件かありました。数に関しては、東間先生から後でお話ししていただきたいと思いますけれども、たくさんあればあったほうがいいということで、タイヤは、たまたま近所に整備工場がありまして、古タイヤを廃棄するときに譲っていただいています。ビールケースも、酒屋さんに行くとちょっと譲っていただけるということで、折りを見ては声をかけて譲っていただくようにしています。

角材も、実際角材で遊ぶことはないんですけれども、おうちを建て直しているところに行っては、この角材、譲ってもらえますかと声をかけたりしています。そういうところで工夫しながら、ただ歩かないで、何か見つけてこようねと言いながらやっています。そうすると、意外といい物がもらえたり、そこからまたいろんな遊びに広がっていったりというところでは、道具を探すのもすごく楽しいと思っています。

それから、ターザンロープをシーツでというところでは、シーツは縫い目があると思うんです。編み方と言いますか、布の縦と横みたいなところも考えながら、三つ編みをしています。そうすると結構頑丈になる。ただ、だんだん使っていくと古くなってしまうので、そこは定期的に点検したり、つくり直したりということは必要だと思います。

ロープのことに関しては、東間先生の本に載っていますね。ロープは太いほうがいいと思いますけれども、今使っているロープは、子どもの手でつかめるような太さなんですね。でも、型が結構しっかりしているので、丈夫だと思います。ただ、擦れていったりすると危険につながるので、点検は必ずしなければいけないと思っているところです。

では、東間先生、数のほうはお願いしていいでしょうか。

東間　数は、まず、園庭がどのぐらい広いかということもありますけれども、狭い園庭でも遊具が多種多数あると、たくさんの子どもが遊べるということを、先ほどからお伝えしていますが、ちょっと計算してみてください。例えば、園庭があるとしますね。ここに１００人の子どもたちがいるとします。工藤先生がおっしゃったように、

できれば、小さい子も大きい子も一緒に遊んだほうが、異年齢がお互いを見られるわけです。一緒に遊ばなくてもいいんですよ。お互いを見られる。とてもいいことなのです。

それを前提としますと、１００人いると、まず、散歩に行くのが半分か3分の1ぐらい。3分の1、30人、散歩に行ったとします。そうすると、残りが70人ですね。この70人分の遊べるものが園庭にどれだけあるかということを数えてください。仮に20人、固定遊具や砂場で遊べるようにします。そうすると、70人から固定遊具で遊ぶ者を引くと50人。この50人が遊べる物。50人のうちで、もしかしたら集団遊びはやるかもしれないけれども、もし集団遊びをやらなかったら、50人分の物を用意すればいいわけです。

そうすると、私、先生方に伺うの。50人の子が可動遊具で遊ぶ場合は、例えば、1人の子が可動遊具でいろいろな組み合わせを考えるとしたら、何個あったらいいと思いますかと言うと、先生たちが指を出して、「そうね、2つの組み合わせじゃつまらないわね。まあ、3つかなあ。4つあれば相当の組み合わせができるかな」というふうに先生方が答えるんですよ。仮に1人4個だとする。そうすると、4×5＝20、２００個の可動遊具があったほうがいいねということになるんですね。そうするとその途端に、「エーッ、２００個!?　もうだめです、そんなものとても買ってもらえません。とても場所がありません」、こういうふうにお答えになって、そこでパッと切れちゃうんですよ。

そこで、私のホームページに書いてありますけれども、２００個の可動遊具は、一体幾らで買えるものなのかというと、それをごらんになってください。東間で検索すればパッと出てきます。4万9，８００円だったら公立保育園でも買えます。あとは、タダのものをいただいてくるんです。こちらでタイヤをもらったとか、畳屋さんへ行って古いござをもらってくるとか、そうやって……。

ですから、子どもを遊ばせようと思ったら、先生の努力というのは、今までは、子どもたちが遊んでいるのを見て、危ない、危ないというのを探すのが先生の役目だったのです。それで注意してやめさせるのが先生の役目だったんですよ。ところが、これから以後は、あそこがもっと欲しい、これはどうやって集めたらいいのだろうか、どうやって置いたらいいのだろうか。これで遊んでいるけど、この後、どんな遊びをするのかな、これ、ちょっと危なさそうなのをやるかなとか、そういうのを見

るのが先生の役目になってくるんですね。それだけの先生の力があればあるほど、子どもたちはすごく安心して遊べます。

あと、例えば、大きい子も遊んでいて異年齢も遊んでいるというと、０・１・２歳が出てくる。いやあ、これは困ったことだと。一番嫌がるのが年長、年中の先生。１歳、０歳が出てくるとがっかりするわけですよ。「嫌だなあ、うちの子どもたちがあの子たちをすっ飛ばしたりしたらどうしよう」と。嫌でしょうがないんですね。

ところが、私がいた保育園では、来ると喜ぶのね。普段、０・１・２歳には触れないから、「わあ！　来た、来た、こっち来て」といって喜ぶの。「その差は何か」というんです。要するに、０、１歳に本当にしっかり身体能力ができていると、ヒョコヒョコ出てきても大丈夫なんです。それを先生たちが見て、「もうヨタヨタしていて、歩き方もできてもいないのに、外に出すな」と思うのか、「オッ、意外といけるじゃない、この子たち平気だよ」と思うのか、そこが０・１歳の先生の手腕なんですよ。そこで０・１歳の子が、しっかりとした足どりで、しっかりと視野を持って自分の行き先を見て歩けるぐらいになるかどうかということを、保育室の環境多種多様の遊具でもってやってほしいんです。保育室の環境がしっかりしたら、子どもたちがしっかりした足取りで外に出られるんです。ぜひ、お願いしたいと思います。

もう一つは、先ほどビールケースのお話が出ましたけれども、ケースというのは、ビールだけではなくて、酒のケースもあれば、牛乳のケースも、いろんなケースがあります。ですから、私の本はケースのことは何も書いてありません。だって、一つ一つ違うし、使い方もいろいろでしょう。そもそも子どもが遊ぶようにはできていませんから、積み重ねても重ね方がとても弱いんです。だから、ポンとやればツーンと滑るのです。

いろいろなところから聞きますと、皆さんが、自分のところにあるケースの性質をよく知っていて、これは三段以上はダメです。だから、三段積んだら上に乗らないという約束になっています、というところがわりと多いですね。

例えば酒のケースですと、二段積んだらのぼれないというのです。だから、これはのぼらないから大丈夫なんですというところもある。そういうふうに、遊具ではないものを入れるときには、一つ一つの園で、どういうふうに使えるかとか十分に見て、それで、お約束をするのは仕方がないと思うのね。だって、遊具じゃないもので遊ぶのですから……。そういうことでもって、一つ一つ

いろいろな物を持ちながら遊んでください。

ターザンロープも、シーツでもそうですね。普通のクレモナロープというのは、強度が測ってありますから、直径何センチで何キロ大丈夫ですよというのが出ていますけれども、自分たちでつくれば、しょうがないから、先生が毎日ぶら下がってみる。そうすると、1人がぶら下がると50キロでしょう。50キロとすると、幼児が3人ぶら下がる、そういった重さですよね。だから、毎日ぶら下がってみて、あ、切れないなと思ったら、多分、大丈夫なのではないかとか、そういうふうにいろいろなさってみてください。

工藤　確かに新しい物を取り入れるときは、保育士が一回試したりもするんですね。どの程度のものかというのを実感しないと、子どもたちの遊びには広がらないかなということも意識してやっています。

それから、「階段の滑り台に体育マットをのせるときの固定の仕方」というご質問でしたけれども、階段には両方に手すりがついていると思いますが、体育マットにも、ちょっと引っかけるのがありますよね。そこで結んでやっています。そうやって固定しています。やはり東間先生もおっしゃったように、そこの環境の中でどう安全を守ってやるかというのは、先生たちが考えてやることなのではないかと思っています。

やっているうちに、だんだん体育マットがズリズリ下がってくるんですけれども、そこを子どもたちが引っ張ったりもするんですね。1歳とか、2歳の子たちが、自分でやろうなんていう姿も見られますけれども、保育士がきちんと安全面を考えてやっていかなければいけないのではないかと思っています。

東間　それでは、私がお預かりしている質問票です。

「2歳児から小集団ができてきて、子どもの遊びが盛り上がってきた」、よかったですね。「しかし、うまく入れない子もいる」、どうするかということですね。

入れない子は、入りたいのに入れないのか、または、そもそも入りたくないのかを見てください。そこでもって保育士の介入の仕方も違ってきますよね。何でもいいからとにかく入りなさい、入りなさいというふうに思わずに、長い目で……。入りたいのに入れないのだったら、何かうまい方法はないかなとか、例えば、その子が主役になっていろいろな物を一人でつくっていて、面白そうな物をつくっていたら、その子が入るのではなくて、その子に入りたくて来ますとか、いろいろな方法がありますよね。

また、可動遊具の遊びというのは、そもそも、始まり

の40分に子どもたちがウロウロしているんですね。40分ウロウロしていると、そのうちに盛り上がるといいますけれども、ウロウロしている間に子どもたちは何をしているかというと、まず、場所を探しています。前川先生がおっしゃった場所とか、それから、遊具の種類とかを決めているんです。そうすると、ここでもって何と仲間が決まっているんです、40分で。この3つがバッチリと決まると、ドーッと盛り上がります。

これが決まるまでに40分かかっています。ですから、そこを見計らって、その40分の間に……。私は、今、「トップランナー」と密かに呼んでいますけれども、クラスにそういう子がいるんですよ。昔は私は「仕掛け人」と言っていたのですが（笑）、それでは悪いから、トップランナーに変えたのです。

例えば、その子が板を持つとすると、見ていて自分も板を持つんです。それで、その子の後にくっついていくんです。そうすると、その子がそれを捨ててほかの物をやると、同じ物を持ってその子の後についていくんです。そういうことを家来はやっていくんですね。大きい子、そのトップちゃんが板をポンと置くと、自分も同じようにポンとそばへ置くと、上の子も下の子もじゃないけど、お互い仲間になるんです。ですから、その日の3・6人というのは、それぞれに人が毎日違うんですよ。全く同じ子がいつも仲間になっているのではないんです。だから、後をくっついていくのにも頭を使っているんですよ。皆さん、そこのところを見てみてね。

だから、その子が本当に入りたくて入れないのだったら、ちょっと突っついてうまくやらせる方法もあるし、自分はトップになりたいと思っているのに誰もついてこないと思う人だって……よく私たちも、中学校や小学校だってそういうことはありましたよね。そこを考えてやってみてください。

それから、「牛乳パックで楽しそうに1歳が遊んでいましたが、幼児の室内にも適していますか」。実は適しています。ある保育園では、例えば4連パックというのは棚にピシャッと入るわけです、同じ形をしていますから。それを各室に30個ずつつくったんです。そのときに先生たちが、もう血を見るような思いでもって、「1日1人、5分でいいからやって」ということでつくったのです。そうすると、自由遊びの時間に4、5歳も遊んでいるんです。もちろん、30個で遊ぶのだったら、せいぜい4～5人ずつしか遊べませんよ。ほかのものもいっぱいいりますけれども、そういうものを足したんですね。

昔は、4歳の後半になると可動遊具から卒業して、も

っと高度な遊びに移っていった。ところが、今のお子様方はだんだん幼くなってきているから、4、5歳になっても4連パックを喜ぶの。

ある保育園では3歳のお部屋に置いたんですね。3歳のお部屋というのは、延長番のお部屋で、そこに置いたんですよ。そうしたら、延長の時間になったら、5歳がこうやって早く来てパッとそれを取るわけです。私が見ていましたら、それを床に並べたら、自分も寝転がって、並べたパックを、こうやって横になって撫でているんですよ、5歳が。今まで、そういう物を使ったことが全くない子どもたちだったから、うれしくて、うれしくて、しょうがないんですね。なぜか、大きい物、重たい物、どっしりした物を動かすのは子どもは好きですね。皆さんも、どうか、もっといろいろな物を考えてみてやってください。

次に、保護者の反応ですね。「固定遊具の点検を専門業者以外でやる方法はあるのか。年数がたっているので心配」。これは、年数がたっているのは物によるんです。先ほどのターザンロープじゃないけれども、全体重をそれに預けるなんていうものは、落っこちるかもしれないし、崩れるかもしれませんね。全体重を預けるというのは非常に難しいものですから、点検というのは、確かに専門業者が点検をやる場合もあれば、私たちがやる場合もある。だから、固定遊具でも、毎日、先生が子どもたちみたいに持って揺らしてみて、と言うの。グラグラ揺れたらだめですね。しかし、グラッとも揺れないものは、まだ大丈夫かもしれません。それから、固定遊具は専門業者さんが来ます。ですから、大丈夫ですね。ですが、それに自分たちが縄を渡したり何かするのは、自分の体重を預けたり、先生が二人でもってユッサユッサやってみたりする。いろいろなそういうものが要ると思います。

それから、「遊びへの効果」については、先ほどちょっと統計表でお見せしましたけれども、保育の質をどのようにしてほかの人に伝えられるかということですね。汐見先生がおっしゃるには、自分たちだけで持っていないで、外へどんどん出しなさい。出すことによって、保育がいかに重要かということがわかる。先生たちは、アピールする方法を知らない。やったほうがいいよということはおっしゃっていましたね。

「子どもたちが飽きてしまってマンネリになった」と書いてありましたね。今日のは違うの？　「どんな話の進め方で提供に至るのか」……ああ、そうか。職員から始めているんですね。今、提供しにくいですか？

質問者　いや、提供している物も、〔延長？〕にあった

ものはうちの園も使ってはいますけれども、新たに導入するときに、提供するまでに至るときに、保育士側だけの思いで提供するのか。それとも、子どもの自由発想を引き出すために、子どもの意見を聞いてみたりするのか、どういう方法をとって進めていくのか。

東間　提供に至るまで子どもの意見を聞くというんですけど、私は、一々、「あなた方はどういう物が欲しいの？」と聞きませんでした。子どもも、例えば、半丸太なんかありますね。そうすると、もっと欲しいよと言いに来ることがあるんです。それは担任の先生がそそのかしたりしてね（笑）。それは買ったことはあるんですね。ただ、どんな物が欲しいの？　と聞いたときに、車が欲しい、飛行機が欲しいと子どもが言ったら、困ってしまいますよね。どうしましょうということになりますね。で、聞きませんでした。

　ですが、自分で、子どもは一体何を欲しているのか、何を欲しているのかということを、きりきり、きりきり、思いましたね。というのは、子どもが変なことをやるときに、危ない、やめてほしいと思ったときに、じゃあ、これに代わるものがあるのではないかということを、いつも考えました。つまり、一々、子どもは何が欲しいと言わなくても、危ない、嫌なことをするたびに、あ、これは子どもが欲しいものだなということがわかりますでしょう。それで私はやっていましたけれども、これは、やはり少し謙虚な顔をして子どもに聞くんでしょうかね。一度聞いてみる？　で、飛行機が欲しいとか言われたらどうする？（笑）「何言ってんのよ、あんたたち」なんて言えないよね。

　そこのところはおもしろいですよ、皆さん。一度やってみたら？　でも、私は、子どもの心がわかるなんて思い上がった気持ちでつくっていまして、みんなつくったものは使われました。でも、もっともっとほかにあるかもしれませんね。

　それから、「自発的な遊び、約束の共通認識はどうしているのか」。少し極端な話ですけれども、今ある環境でもって自由にさせられるという物だけを入れてほしいと思うの。約束や何かをしなければならないものは、やめたほうがいいと思います。少し極端でしょ？　そうしたら、入れるものないよなんて思うかもしれないけれど、私は何種類も何種類も考えました。皆さん考えてください。どうでしょうか？

　ただし、ビールケースの話があるでしょう。あれ、約束。それから、今まで約束したのは、ジャングルジムのぼり方。1歳は一段ぐらいかな。2歳は二段ぐらいか

な。だって、あのジャングルジムは私が入れたものではない。もう既にあるんだもの。それと、あれは幼児用のジャングルジムなんですよ。乳児用のジャングルジムではないのね。そういうものはありますよね。

だから、既にあるものはしょうがない。ですが、ジャングルジムというのは、三段目、四段目、上がりますと、真ん中のほうというのは手が届かないの。自分も真ん中に入れないんですよ。だから、こんなことをして、私、やったの。こんなことしても、ガッとつかめたのは衣服だけ。中身はストンと落っこちた。私はそれをやってから……もはや限界だから、悪いけど、ジャングルジムの自由はやめました。

だから、ビールケースももしかしたら約束がある……。ただし、ビールケースというのは、一段、二段でも、とてもおもしろい遊びができるのよね。あれだけおもしろい遊びができるのだったら、約束と引きかえに、プラスマイナス、プラスじゃないかと私は思うんですね。皆さん、つらいところですが、いろいろなそういう工夫もありますね。何を東間は答えただろうと思って……困っちゃうわね。世の中というのはそういう苦しいものです（笑）。すみませんね。

「遊具の配置や種類、子どもの興味や季節などはないか」。つまり、遊具の入れかえをするということもあるんですね。可動遊具というのは入れかえをしません。なぜしないかというと、そのもので子どもが上達するんですよ。つまり、多種ですから、いろいろな組み合わせをするわけでしょう。いろいろな置き方をすると、1年中、違ったものができて、どんどん上達するんです。これは、作り方も上達しますが、つくったもので遊ぶ遊び方も、身体機能も上達していて、一度出すと、3年目ぐらいに物すごく立派なものができるようになります。

ですから、少なくともどんなことをしても3年目。ただ、その間に、これはどうしても危ないよとか、少なくなっちゃったとか、どうしても後から足せないものとか、そういうものもあるかもしれませんし、それは仕方のないことだと思いますが、入れかえなんかしようと思っても、入れかえる場所がないのよね。置く場所もない。ですが、絶対上達しますから、やってみてください。

前のお話のところで、少し遊びがマンネリ化しているという質問をいただきました？　していない？

質問者　もしかしたら、あったかもしれません。

工藤　こちらでいただいたものです。

東間　以前にいただいていますね。種類が少なかったらマンネリになります。だから、マンネリになりそうだっ

たら次々と新しいものを入れてください。例えば私の本で、1冊の本では27種類ぐらいあるし、もう一つの一昨年出た本には、15種類か20種類ぐらいの種類があります。それ以外にも、どんどん皆さんで考えてみてください。というのは、私の遊具をお使いになって2年ぐらいたったら、「あ、この程度のものか。それなら私たちだって考えられる」ということで、考えられると思います。ですから、どうぞそんなふうにしてください。

実は私がやっていたときは、0・1歳からやっていくと、4歳の後半で大体卒業しました、この程度の。4歳の後半からは、ルールのある遊びとか、もっと複雑な遊びとか、高度な遊びのほうに行きますね。そこを先生が受け止めて、ちょっと高度な遊びをいろいろ提供してみたり、子どもたちに工夫させてみたり、そういうことをしてもらいたいと思いましたが、どうも、私の実践はその辺でちょっと終わりになってしまいました。どうか先生方、もしそういうときが来たら……ところが、幸か不幸か、今の子は4歳になっても、5歳になっても、その可動遊具、毎日毎日毎日、喜んで使うの。これが、もう飽きたよ、もっと高度なこと、というふうになってくれたほうが本当はいいような気がしますね。

タイヤについてタイヤはどれだけもつかというと、30年はもつんです、皆さん。それで、ある先生が私に言ったの。意地悪な先生がね、「先生、タイヤ、タイヤっていっぱい集めますけど、捨てるのが大変なんでしょう？　職員の気持ちも察してください」と言ったの。私は、だって子どもたちがこんなに喜ぶものを、何でそんなこと言うの？　と思ったから、思わず言い返しちゃったの。「先生、タイヤというのは30年もつんですよ。先生が心配するけど、あなたなんかその頃いませんよ。私はもっと先にいなくなるけど」って言っちゃった（笑）。自分が捨てることを思って子どものタイヤを取り上げるなんて、そういう自分本位の先生がいるのね。給料返せと言いたくなるくらいですけど、まあ、皆さん、頑張ってね。

「東間のぱたぱたをつくって、牛乳パック用具の片づけ方はどのような感じでしょうか」。

片づけ方というのは、お片づけなのか、それとも収納の場所なのかな？　お片づけは赤ちゃんでも意外と……まあ、赤ちゃんだから、これはないけれども、十分遊ばせれば、ちゃんと片づけを持ってくるのね。

実は横浜のある保育園で、かみつきが起こってどうしようもないというので、私が飛んでいって、そこでもって、「4連パックを100個つくってください」と言っ

たんです。１００個つくって、こんな大きいトイレットペーパーが入っている箱を二重にして、そこへボンボン入れて、それを廊下にしまうようにしたんです。そうしたら、子どもたちがよく遊んで、かみつきがなくなった。初めは先生が６人入っていたけれども、今は２人で大丈夫ですというくらい、かみつきがなくなったのですが、私が先生に、「先生、ごめんね。片づけるときに１００個も片づけるから大変でしょう？」と言ったら、先生がすました顔して、「いいえ、子どもたちがみんな運んでくれるから、私はここに座っているだけでいいんです」と。本当にそのとおりなんですね。子どもたちがエッサカホイサカ持ってきて喜んでやるから、先生はそれを補助するだけでいいわけです。片づけを嫌がるということは、遊び切ってないんですね。

それから、先ほど申し上げましたように、４連パックはバチッと入るんですよね。ところが、Ｌ字とか、Ｕ字というのは、なかなかバチッとならないので、場所がちょっと要りますね。申し訳ありませんが、Ｕ字というのはこういうふうにも置ける。横にも置ける。逆さまにも置ける。いろいろ子どもたちは工夫するから、Ｌ字は０歳が欲しい、Ｕ字は２歳が欲しい。４連パックは５歳児まで使っているということでもって、この辺でご質問のお答えにさせてください。

次は、「３～５歳児に牛乳パックをどうしたらいいか」ということは、先ほどお答えしました。

次に、「乳児が園庭に出ることが多いが、貸し切って使うこともある。年長が遊びきれていない。どのようにしたらいいか」というのは、そんなわけで、乳児がシカーッとすれば……。というのは、なぜかといいますと、運動神経をよくするためには、先ほど前川先生がおっしゃったように、うんと転べばいいんです。私の本にも書いてあります。転ぶためには、保育室でないと痛いんですよ。よく皆さん、園庭で運動神経がよくなると思いますが、実は、運動神経がうんとよくなるのは保育室なのです。しかも、畳の上とか、絨毯の上なのです。これ、レスリングと同じです。お相撲の場所もやわらかい土俵ですね。ああいうところでうんと転ぶと、転ばないようになります。また、転ぶことが好きでね。

なぜ、私は乳児室内でもって転んでもらいたいかといいますと、室内では、今、なるべく静かに座りなさい、座りなさいという保育がまた蔓延しているんですよ。これがどれだけ子どもに無理がかかるかということなんですけれども、それを私が園長のときに言いましたら、職員が言ったの。「これはしつけです。どうしてあなた

は、室内でドカドカさせてやってくれなんて言えるんですか。その裏付けを見せてほしい」と。すごい保育士たちでしょう？　昔々は、そういうひどいのがいまして、私は困った。だけど、困っても、私は科学的にそれを証明することができなかったの。「子どもがそんなに欲しているじゃない」という言い方は通用しなかったのね、しつけの前には。

私はそのとき、悩んで悩んで、仕方がないから基本的に考えようと思って、どうしたかといいますと、朝、子どもたちが比較的自由にしている時間、それから４時半ごろ、比較的自由にしている時間に、子どもは大きな動きをどのぐらい、何人ぐらいしているのか。それから、腰掛けたり、座ったり、小さな動きを何人ぐらいしているかというのを、１、２、３、４、５と目で数えて、手の中に小さく書きました。それを７年間続けて集計したんです。

そうしましたらば、1歳では70％の子がドカドカしている。2歳では60％の子。3歳では50％の子がドカドカしていて、5歳になりますと、40％の子が、立ったり歩いたり、寝転がったり、ドカドカしている。つまり、5歳までで逆転するんですね。ということは、自由にさせてみたら、子どもというのは、立ったり、座ったり、転がったり、そういうことをしたい。これが自然な動き。この自然な動きに遊具や環境を合わせたらいいのではないかと思って、それで、牛乳パックだの、ぱたぱただの、いろいろなものをつくったのはそこからなんです。

それで7年間続けて、それを日本発達心理学会に発表しました。そして、これは非常に信頼すべき情報であるということは、偉い先生方からいただいたんですね。ただし……ただしですよ。もしもあの保育士たちにこれを持っていっても、「子どもの動きがそうだということはわかったけれども、これはしつけです」と、多分、言い返すでしょうね。7年たったら、みんな異動で誰もいなくなってしまったんですね。そういうことがありました。

ですから、私はそれを基本にして、子どものやりたいように……。それから、私の本にこういうページがあって、モデルケースといってモデルがありまして、子どもの保育室のつくり方は、70％がドカドカできる場所で、30％がコーナー。いわゆるおうちごっこのコーナーと、もう一つは、絵本やパズルができるコーナーというふうに分けたわけです。この70％は、ドカドカする物を子どもたちが自分で出してきて、ドカドカするのですが、これを片づけたところに布団が敷けるわけです。そうすると、ちょうどよかったです。子どもたちは、ドカドカの

子はドカドカしたいし、静かにする子は静かにしていたいし、よかったですから、ちょっと本を見てください。

もう一つは、「投げたり、違う遊びになってしまっても……」。投げるというのは、子どもの中にエネルギーがたくさんたまるから投げるのであって、大きな重たい遊具を、その間、一生懸命したり何かして、自分の体重の3分の1ぐらいのものをやりますから、投げたりするようなエネルギーはもうなくなっちゃうんですね。投げなくなって、違う遊びになる。

ここが問題なんです。例えば、ままごとコーナーにザルがあったんですね。そのザルを子どもというのは必ずどの子もかぶります。かぶって歩いたら、これは違う遊びです。ザルはかぶるものじゃありませんと言う先生と、これはやりたいんだからやってもいいんじゃないか、と。「しつけです」という先生はザルをかぶらせない。ですが、例えば紙のお皿をパッとやったらヒュッと飛んだ。そうしたら、「あっ、飛行機！」と言った子どもがいたんです。そうしたら大変です。「これはお皿ですから、投げるものではありません！」と。皆さんはどっちをお採りになりますか？　これはお皿ですと言ったら、その子の一生は全部お皿ですよ（笑）。

それでは、もう一つ。「タイヤ、ビールケースを園庭に置いておくこと。ビールケースは3つ以上積むと……」、これは同じですね。危険性のことを言っていらっしゃいます。

それでは、先生、今のご質問は終わります。

前川　僕のところに質問が来ていまして、「子ども時代に真剣に遊びきるといった体験がとても大切だと思い、日々、保育を考えています。遊びの本質、楽しさを知らないまま大人になると、どうなるでしょうか。これが今後起きてくるのではないかと懸念しております」。今日のシンポジウムは、こういう方がいないように一生懸命やっていますけれども、人間というのは、人と人とのふれあいによって育つのですよね。子どものころのある時期に、ふれあいによっていろんなことを体験して学習するのが「遊び」なのです。もしそれをやらないと、人間らしからぬ人になるのです。よくいますでしょう？　コンピュータは強いけれども、人と話ができないとか、そういうことになってしまうと僕は思います。

ここにいる皆様、目をつぶって、子どものころ、そういうふうに楽しかった思い出のある方、手を挙げてみてくれる？

それでも結構いらっしゃいますね。逆に、手を挙げない人はそういう原風景がないので、これからでもいいで

すから、ぜひ、自分の心の中に楽しい思い出があるような大人になったらいいと思います。これは難しいんですね……。これからますます、効率第一でこういうことをやっていると、ますますそういう大人が増えて、世の中がますます暮らしにくくなるというのが僕の心配事です。これは、社会全体が変わってくれなければどうにもなりません。

あと10分ほど時間がありますけれども、ここで、ぜひ皆様に感じてほしいのは東間先生の情熱です。子どもに対する細かい観察――僕は小児科を五十年以上やっています。子どもの発達とか成長を専門にやっていますけれども、先生はそれ以上の観察眼を持っています。ですから、この情熱を見習って、ぜひ、今言った子どもたちのための園での遊びの工夫をしてくれたら最高だと思います。

ところで、ぜひ、東間先生、工藤先生に最後に質問しておきたいという方がいらしたら、遠慮なく手を挙げてみてください。もう十分ですか。特にいいですか。ここのところを聞いておかないと帰れないという方、いらっしゃらない？

では、工藤先生、一言、今日のことでまとめてくれる？何でもいいです。

工藤　ほかの質問のところであったのですけれども、若い保育士さんたちをどう指導していくのか。子どもの見方だったり、かかわり方だったり、「浅い」というところで、どんなふうに指導していったらいいかというご質問があったんですね。実際、経験の多い方と浅い方での子どもの見方、考え方というのはやはり違うだろうなと。経験を重ねることで、子どもの見方というのはしっかりしてくるのだろうと思いますけれども、先日、こんなことがあったんですね。

映像にもありましたけれども、0歳児の子どもが階段をよつばいで上ろうと。一応、そういうふうな形で保育は進めていたのですけれども、たまたま一人のお子さんが、手すりを持ってのぼりたいというので、手すりに手をかけたんです。そうしたら、若い保育士さんは危ないと言って、手すりから離させたのです。そうしたら、子どもは自分のやりたいことを制止されたと思って、ぐずったんです。私はその姿を見ていて、「やりたいというのだから、ちょっと様子を見るのはどう?」というふうに声をかけたんですね。でも、その経験の浅い保育士さんは、転倒したらどうしよう、ほかにいる子どもたちも真似したらどうしようと、そこに気持ちが行ってしまって、すごく気持ちが揺らいだ。じゃあ、そこは私も一緒

に見るよといって、見たんですね。
　そうしたら、その子は、やれるという喜びでちゃんと手すりを持って……。保育士は、両手でのぼるのではないかと思ったと思うんです。でも、その子は、片手は手すりで、片手は階段を押さえて、こうやってのぼったんです。もう満足してニコニコしながら上がっていったんですね。どこまでのぼるかなあと思ったら、途中でやめて、よつばいでのぼっていったんですね。
　そのときに保育士さんがそこで止めてしまったら、その子の先の姿が見えなかったよねということで、この子の発達、興味は、今、どこにあるんだろうという話をしたことがあります。若い先生たちは、見通しが持てない怖さ、不安があるんだなというのをそこで実感しました。保育士さんはその子にピッタリくっついている。ああ、ここが経験が浅いところなんだなというところも感じて、園長として、どんなふうに若い子たちを育てていかなければいけないのかという学びになった場面でしたけれども、そうやってみんなでかかわって見ていく。子どもだけではない。職員同士も連携していかなければいけないというふうに思っています。
　子どもをどう見ていくか。保育園でも、この子の姿というのはどこにあるんだろう、心はどこにあるんだろう、ということを大事にしていかなければいけないと思っているところです。ですから、ぜひ実践につなげて、何か報告をいただけるとうれしいですね。今日はありがとうございました。

前川　では、東間先生、どうぞ。

東間　いっぱいありますけれども……。今、「危険」ということに私たちがどういうふうに対応するかというところですけれども、例えば4連パックをたくさん入れますと、積むんです。先ほど、工藤先生から、一番上にのぼったらパッと手を出す。先生がパッと手を持ってポンとおろしてやるというのがあったら、先生は、知らん顔と言ったら変だけど、そういうふうにするとおっしゃいましたね。皆さん、その意味がよくわかりましたでしょう？　あの「意味」ね。つまり、子どもにも責任をとらせるのよ。
　のぼりというのはすごい簡単なんです、目の前を見ながらのぼればいいのだから。ところが、「おり」というのは自分の足の下を見なければならない。すごく難しいんです。だから、私は実は「おり」から始めてもらいたいぐらいなのね。だけど、そうはいかない。そうすると、責任はとれないから、またこうやってポンとおろしても

らったら、楽しいですね。そうではなくて、４連パックは「おり」もやってほしいんです。一段でも二段でもいいから、おりをやってほしい。

私も今、悩んでいるんですけれども、どうでしょうかこの方法。先生がわざと……ここに子どもがいる。いつでもパッと抱きとめられるけれども、ちょっと向こうを向いて、全体を見ている。そうすると、この子が一生懸命先生のほうを見るけれども、先生は向こうを見ていたら、簡単に登ったりはしないかもしれませんね。それで、もしグラッときたら、パッと抱きとめられる。小さい１～２歳の子どもだったら、それができると思うんですね。先生方、どうぞ、グラッときたらパッということができるように。

それができないと思ったら、仕方がないから、ほかの方法を考えてください。でも、これが私はプロフェッショナルだと思います。それで抱きとった途端に、一言、「怖かったね」とか、「危なかったね」と言えば、「ああ、これが危ないということなのか」と。いつも、危ないわよ、危ないわよってやめさせるけれど、危ないというのはどういうことなのかわかりませんね。ちょっとドキッとする。それで子どもが自分で体感する。いかがでしょうか。これは難しいですね。そのうち、先生方もできると思います。

もう一つは、今、工藤先生が、「子どもたちを見ていて」と言いましたね。見ていてというのは大変なことなんです。例えば、この会場の端っこから端っこまで、私たちがここにいて、全部の人たちのことが目に入っているかということと同じなんですけれども、子どもというのは複数を見なければなりませんね。そのときに一人か二人しか見ていないとか、一人抱っこしたらそれっきりだと。そうすると、そういう保育士を見ているのも腹が立ってくるの、実は。だけど、同僚ですよ。同僚というのは言いづらいのね。園長には盾突いても、同僚にそんなことを言ったら、明日から大変なことになってしまう。だから言えないの。

そのときどうするかというと、悔しいかもしれないけれども、先生たち、そこを突き抜けちゃって、いいわ、この人は使いものにならないのだから、この人の分まで私が二人分見ればいいんだ、こういうふうに思ってください。

なぜかというと、私が保育士になったころは、０・１・２歳は１人で10人見るんです。３・４・５歳は１人で30人を見るんですよ。先輩たちはずっとそれでやってきたの。それで言うの。「あのときなんかさ、怪我したのお

ぼえてるわよね。何ちゃんが何ちゃんを、ほら、あれやって、怪我したでしょ。それから、ほら、あのときは何ちゃん、何ちゃんが怪我したでしょう。そのくらいよね、怪我の数ってね」と言うのよね。

つまり、今の怪我の率と、先輩が見ていた怪我の率はそんな変わらなかった。だから、ゼロちゃんを1人で10人見ろなんていうけど、目が行くだけは行きますよ。そうすると、「貯金」なの。つまり、いつも貯金を全部使ってしまって、お金が何にもなくてずっと定年までいるのと、私は、二人分、三人分の貯金があって、いつでも使える。しかも、その貯金は、使えば使うほど増えるでしょう。だから、どうか皆さん、知らん顔して、保育士二人分、三人分、見ちゃってください。まず、目が行くということ。目が行けば体が行く。体がついていかなかったら怒鳴る。「やめなさい！」、「危ない！」、そういうふうにね（笑）。

私は、最後の保育士で、1人で幼児30人見ました。だから、今こうやって皆さんの前で、大きな顔で話せるのよ。ですから、密かに自分の力を、早いうちに貯金してください。20代で貯金しちゃってください。そうしたら、60歳まで平気で過ごせるの。

ということで、ありがとうございます。

前川　ありがとうございます。

今日は、「子どもたちの遊びと体づくり」ということでシンポジウムをしましたけれども、どうですか。皆様、期待していたような、何か得ることはありましたか。いいですか。

それで、東間先生のお話を受けまして、人間の体には限りない新しい鉱脈があるんですよね。それをいかに発掘して次につなげるか、ということだと思います。子どもたちの心と体を育てるために、自分たちの考え、固定概念を変えてほしいのです。ぜひ新しいことに挑戦してほしいというのが、今日の私のむすびの言葉だと思います。

長時間、どうもありがとうございました。（拍手）

講師紹介

前川　喜平（まえかわ　きへい）――――――――

東京慈恵会医科大学名誉教授

東京慈恵会医科大学卒業後、同大学小児科教授を経て現職。

１９９６年より（公財）母子健康協会主催　シンポジウム統括を努める、同協会理事。

第１００回日本小児科学会会長、日本小児保健学会名誉会長・神奈川県立保健福祉大学名誉教授。

主な著書に「小児の神経と発達の診かた」（新興医学出版社）

「乳幼児健診の神経学的チェック法」（南山堂）など

工藤恭子（くどう　きょうこ））――――――――

東京都目黒区立南保育園園長

東京都目黒区立不動保育園園長を経て現職

東間　掬子（とうま　きくこ））――――――――

元東京都杉並区立保育園園長

こども環境アドバイザー、日本児童安全学会会員、日本保育学会会員

著書

「あなたが変える庭遊び」サンパティックカフェ

「あなたが変える室内遊び」サンパティックカフェ

「０・１・２歳用　手作り遊具」世界文化社

「豊かな遊びを引き出す手作り遊具」チャイルド社

雑誌に連載

「エデュカーレ」臨床育児・保育研究会

トーマが行く　遊び環境ならまかせて

「ＰｕｒｉＰｕｒｉ」生活文化社

０・１・２歳児の生活と遊び